

K-737

山形県山形市

# 山形西高敷地内遺跡

—都市計画道路美畠天童線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2004

山形市教育委員会  
山武考古学研究所





山形県山形市

# 山形西高敷地内遺跡

—都市計画道路美畠天童線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2004

山形市教育委員会  
山武考古学研究所





1号埋設土器出土深鉢

39

SK7出土深鉢



22





## 序 文

本書は、平成15年度に民間の調査組織である山武考古学研究所に委託して実施した山形西高敷地内遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

山形西高敷地内遺跡は、山形市鉄砲町の山形県立山形西高等学校の敷地内に所在し、同校々舎の増築工事などに伴い、これまでにも数次の発掘調査が実施されてきました。その結果、縄文時代から奈良・平安時代にかけて連續と先人の営みが繰り返されてきたことが明らかになっております。

このたび、同校の西側の都市計画道路美畑天童線道路改良工事に先立って発掘調査を実施いたしました。その結果、縄文時代中期と平安時代の文化層が確認され、特に縄文時代の遺構・遺物は、現地表下約2mから良好な状態で出土しました。中でも大型の深鉢形土器の内部から出土した、精巧な文様の上に鮮やかな赤で彩色されたほぼ完形の小型深鉢形土器は、その出土状況と合わせ、縄文時代の人々の精神性を強く感じさせるものです。

この山形西高敷地内遺跡をはじめ、山形市内には約300ヶ所の遺跡が確認されており、これらは郷土の歴史や文化を正しく理解する上で、欠くことのできない市民共有の財産となっております。当市教育委員会では、今後とも開発事業との調整をはかりながら埋蔵文化財の保護に一層努めてまいります。

本書が、埋蔵文化財の保護啓蒙のために、また皆様の郷土史探求の一助としてご活用いただければ、誠に幸いあります。

最後になりましたが、調査において多大なご理解とご協力をいただきました地元の方々をはじめ、時間の限られた中で調査を担当していただきました山武考古学研究所の皆様、お手伝いいただいた作業員の皆様、そして工事関係者並びに関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成16年3月

山形市教育委員会  
教育長 大 場 登

## 例　　言

- 1 本書は、山形県山形市若葉町12-21に所在する山形西高敷地内遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、都市計画道路美畑天童線道路改良工事に伴って実施した。
- 3 発掘調査から報告書刊行に至る業務は、山形市教育委員会が主体となり、同教育委員会から委託を受けた山武考古学研究所が行った。
- 4 遺跡の面積及び調査期間・調査担当者は、下記の通りである。

調査面積 800m<sup>2</sup> (1,600m<sup>2</sup> 2面)  
現地調査 平成15年9月25日～同年11月30日  
調査指導 山形市教育委員会 社会教育課  
調査担当 桐谷優、渡邊聰（山武考古学研究所）
- 5 本書の執筆・編集は、桐谷優、湯原勝美、武田和宏が行った。
- 6 リン分析はパリノ・サーヴェイ（株）に依頼し、その結果は付章に集録した。
- 7 AMS法による放射線炭素年代測定は、国立歴史民俗博物館情報資料研究部研究员小林謙一氏に依頼し、その結果は別途報告する。
- 8 出土品及び原図・写真類は、山形市教育委員会が保管している。
- 9 発掘調査から報告書刊行に至るまで、下記の諸機関にご指導・ご協力いただいた。

山形県教育庁社会教育課文化財保護室 山形市都市開発部都市計画課 山形建設株式会社  
(有)新成田総合社
- 10 現地調査並びに整理調査参加者は、下記の通りである。（敬称略）

石垣勝幸 伊藤省三 伊藤真喜子 稲村勝美 小笠原吉二 関沼孝子 関口幸子 白田 敬 丹野 廣  
丹野ヒデ子 中村達久 草刈利男 草刈多喜 菅原一雄 木村弘一 木村久美子 菅野栄子 梅山 淳  
西山智佳子 竹本八重子

## 凡　　例

- 1 本書で使用した地形図並びに遺構図・遺物図の縮尺は、各図に示した。
- 2 図中の北方向は座標北を示す。
- 3 遺物番号は、挿図番号・写真図版番号共に一致する。
- 4 現地調査段階で土坑・ピットとして取扱い、整理調査で掘立柱建物跡として認識した遺構は、遺構番号を掘立柱建物跡に改めて報告した。
- 5 調査で用いた略号は、下記の通りである。

山形西高敷地内遺跡：ニシコウ2003 坑穴住居跡：S I 掘立柱建物跡：S B  
土坑：SK ピット：SP 河道跡：SD 柱穴：P 埋設土器：埋設
- 6 本書で使用したスクリントーンは、以下の通りである

 地山

 赤色酸化

 柱痕跡・あたり

# 目 次

## 序 文

例言・凡例

## 本文目次

第1章 調査に至る経緯 .....	1	2 挖立柱建物跡 .....	8
第2章 遺跡の立地と環境 .....	1	3 河道跡 .....	9
第1節 地理的環境 .....	1	4 土坑とピット .....	9
第2節 歴史的環境 .....	1	5 埋設土器 .....	11
第3章 調査の方法と経過 .....	3	6 下層遺物包含層 .....	11
第1節 調査の方法 .....	3	第3節 古代の遺構と遺物 .....	12
第2節 調査の経過 .....	3	1 積穴住居跡 .....	12
第3節 基本堆積土層 .....	3	2 ピット .....	12
第4章 検出された遺構と遺物 .....	7	3 上層遺物包含層 .....	12
第1節 遺跡の概要 .....	7	第5章 まとめ .....	12
第2節 縄文時代の遺構と遺物 .....	7	付 章 自然科学分析 .....	14
1 積穴住居跡 .....	7	抄 錄	

## 挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡 .....	25
第2図 遺跡調査区域図 .....	26
第3図 調査区グリッド設定 .....	27
第4図 基本堆積土層図 .....	28
第5図 遺跡全体図 .....	29
第6図 SI1 .....	30
第7図 SI2・3 .....	31
第8図 SI5 .....	32
第9図 SI6、SB1 .....	33
第10図 SB2 .....	34
第11図 SD1、SK2・7・21 .....	25
第12図 SK4・6・9・54、1・2号埋設 .....	26
第13図 SI1・3出土遺物 .....	27
第14図 SI3・5・6、SB1出土遺物 .....	28
第15図 SK4・7・9出土遺物 .....	29
第16図 SK11・20・24・42・47・ 50・52・54・56出土遺物 .....	30
第17図 1・2号埋設、下層包含層出土遺物 .....	31
第18図 下層包含層出土遺物 .....	32
第19図 下層包含層出土遺物 .....	33
第20図 SI4、SI4・上層包含層出土遺物 .....	34

## 表 目 次

別表1 土坑・ピット観察表 .....	16	別表2 遺物観察表 .....	18
---------------------	----	-----------------	----

## 写真図版目次

卷頭図版	図版5 出土遺物
図版1 1区 全景写真他	図版6 出土遺物
図版2 遺構	図版7 出土遺物
図版3 遺構	図版8 出土遺物
図版4 遺構	図版9 出土遺物
	図版10 出土遺物



番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	山形西高倉地内	集落跡	縄文・奈良～平安	24	飯坂館	城跡跡	中世
2	にじゅく寺	集落跡	縄文	25	飯坂	古墳	
3	熊ノ面	集落跡	縄文	26	五日町古墳	古墳	古墳
4	中桜田	集落跡	縄文中期	27	山形城三の丸	城跡跡	中～近世
5	松山	集落跡	縄文	28	山形城	城跡跡	中～近世
6	松見町	集落跡	中世	29	城南一丁目	城跡跡	奈良・平安・中～近世
7	坂田	集落跡	弥生・古墳・奈良～平安	30	山形城三の丸	城跡跡	中～近世
8	江保	集落跡	古墳	31	小白川両山	集落跡	古墳
9	吹笛の木	集落跡	古墳	32	三浦船倉	城跡跡	中世
10	五日町	集落跡	奈良～平安	33	荒瀬	集落跡	中世
11	其爾代桑里	集落跡	奈良～平安	34	幾ヶ園	集落跡	奈良～平安
12	崎	集落跡	古墳	35	落合	集落跡	古墳・奈良～平安
13	志戸田	包含地	縄文・奈良～平安	36	上り越下り龟古墳	古墳	古墳
14	志戸田綱	集落跡	奈良～平安・中世	37	前明石	集落跡	古墳
15	陣場	包含地	古墳	38	二段田	集落跡	縄文・平安
16	宮町古墳	古墳	古墳・奈良～平安	39	寺森	集落跡	古墳・平安
17	川原田	集落跡	古墳	40	川森	集落跡	古墳
18	落合鶴	城跡跡	中世	41	森原	集落跡	古墳・奈良～平安・中世
19	宮町円塚寺	集落跡	奈良～平安・中世	42	本沢川	集落跡	縄文
20	宮町三小	集落跡	奈良～平安	43	吉原鮎ノ内	城跡跡	中世
21	高輪町五中	集落跡	奈良～平安	44	吉原Ⅰ蓮跡	集落跡	奈良～平安・中世
22	鹿田	集落跡	縄文	45	青田	集落跡	奈良～平安
23	城跡跡の内	城跡跡	中世	46	永大ハウス裏	包含地	縄文

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡（国土地理院5万分の1地形図「山形」）

## 第1章 調査に至る経緯

山形西高敷地内遺跡（県遺跡番号：29）は、県立山形西高等学校敷地内に所在する。

平成15年度に同校隣接地において、都市計画道路美畠天童線道路改良工事が計画された。同年4月に山形市都市開発部より、土木工事予定地内における埋蔵文化財の所在の有無について照会があり、これを受けた山形市教育委員会では事業予定地で試掘調査を実施した。その結果、同遺跡の広がりが確認されたため、都市開発部と教育委員会での取り扱いについて協議をおこない、保存が困難であることから事前調査を実施することとなった。同年9月に、都市開発部より都市計画道路美畠天童線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査について実施の依頼があったが、教育委員会の体制では対応が困難であったため、調査を民間の調査組織に委託して実施することとした。

委託先を山武考古学研究所に決定し、同年9月に埋蔵文化財調査事業業務委託の契約を締結後、速やかに発掘調査に着手した。

## 第2章 遺跡の立地と環境

### 第1節 地理的環境

山形市は、山形県内陸中央部にある山形盆地の南部に位置している。市街地は、最上川の支流である馬見ヶ崎川によって形成された半径約5kmの扇状地上に立地し、地勢は東から西へ約130m程の落差をもって傾斜し、扇状地特有の地形を示している。扇状地の扇側は山麓線に接し、扇状地の上面を成している。扇端部は明瞭ではないものの、霞城公園付近を南北に走る湧水帯が一応扇端と考えられており、その西方に扇状地前縁部ともいべき漸移帯が広がっている。

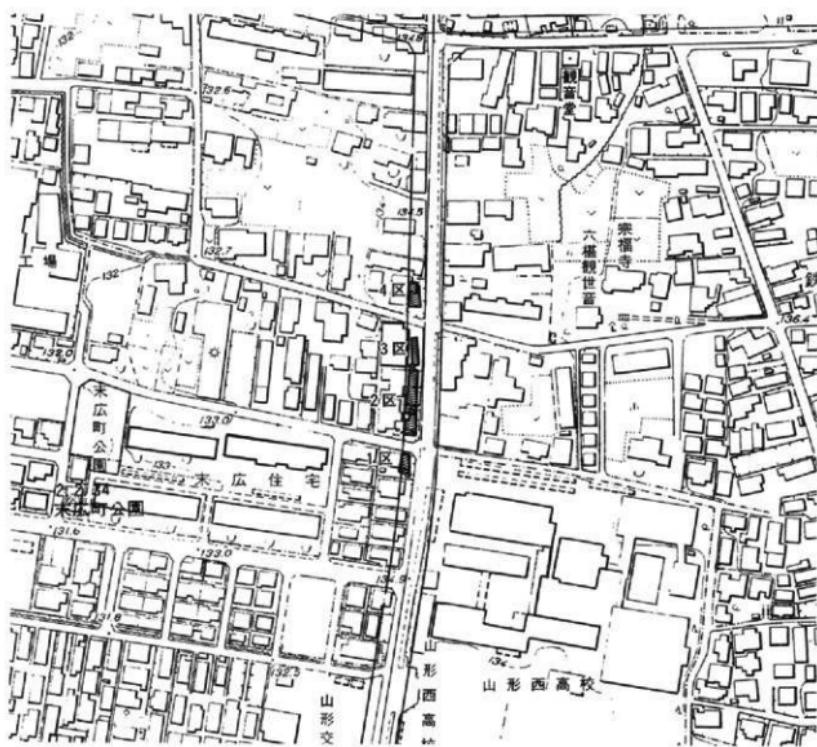
馬見ヶ崎川は現在、蔵王山から北北東に流路をとるが、古くは扇状地の形成過程の途次に水害をもたらしていた。そのため17世紀前半にその流路を変化させ、城下町一帯に灌漑・取水のため用水路が放射状に造成された。その内の代表的なものが「山形五堰」と称されて現在に至っている。この扇状地の扇頂部から扇尖部にかけては水流が伏流し、かつ地下水が深いため畑地や宅地等に使用されている。扇端部では豊富な湧水が飲料水や水田の灌漑に用いられる他、山形城二の丸の堀水としても利用された〔山形県埋蔵文化財センター2003〕。

山形西高敷地内遺跡は、この馬見ヶ崎川扇状地の扇尖部、微高地に立地し、JR山形駅から南方約1km地点に所在する。標高は約134m前後である。

### 第2節 歴史的環境

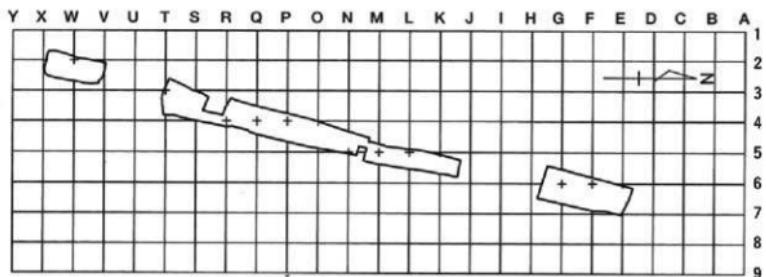
馬見ヶ崎川扇状地では、縄文時代から現代まで連続として人々の生活が営まれていた。当扇状地付近で最も古い時期の遺跡は、大字上山家に所在するにひやく寺遺跡（2）であり、縄文時代早期中葉から前期初頭の土器が確認されている。この地域は扇状地の山麓線と接する場所で、早くから地形が安定し、住環境が整ったものと思われる〔山形県教委1973〕。

縄文時代中期前葉になると、前述のにひやく寺遺跡のほか、熊ノ前遺跡（3）・中桜田遺跡（4）などが扇頂部にみられ、中期中葉には松山遺跡（5）・松見町遺跡（6）などが扇尖部に延びて行く。弥生時代から古墳時代にかけては、塙田遺跡（7）・江保遺跡（8）・桧葉ノ木遺跡（9）などが扇端部やその周辺にみられ、この時期、遺跡の低地への活発な進出が窺える。古代では、湧水の豊富な扇端部に五日町遺跡（10）など多くの遺跡が所在し、長苗代条里遺跡（11）のような律令期の条里跡も確認されている。



第2図 遺跡調査区域図

1 / 2,500



第3図 調査区グリッド設定図

## 第3章 調査の方法と経過

### 第1節 調査の方法

本調査は、山形市教育委員会による試掘調査結果を踏まえて実施した。表土除去作業は重機を使用して行い、遺物包含層（縄文時代、古代）は人力で掘り下げた。遺構確認は古代と縄文時代の2面で行った。基準杭の設定は任意座標とした。調査区を区画するグリッドは5m×5mで設定し、X軸は北から南へA～Y、Y軸は東から西へ1～9とし、「A 1」等と位置を示した。

遺構実測並びに遺物の取り上げは、トータルステーションで行った。

写真撮影は、35mm白黒、35mmカラーリバーサル、6×7判白黒カメラを使用した。

### 第2節 調査の経過

現地調査は、平成15年9月25日から同年11月30日まで実施した。調査区は便宜上、1区から4区までに分割し、調査は1区から開始した。

9月期 25日 現地（調査区域）の確認を行う。26日 プレハブ、トイレ等の設営作業。29日 1・2区の表土掘削開始。

10月期 1日 作業員を導入し、遺物包含層調査開始。3日 遺構検出作業の後、遺構調査を開始。1区において複式炉を有する住居跡を確認。6日 2区の遺物包含層調査を開始。8日 2区の遺構調査開始。11日 市教育委員会主催の現地説明会を開催。14日 1区の調査を終了。2区の遺構調査継続。15・16日 1区の埋め戻し作業実施。23日 2区の調査を終了し、埋め戻し作業開始。3区の表土掘削実施。25～28日 3区の遺構調査実施。29・30日 3区の埋め戻し作業実施。

11月期 17・18日 4区の表土掘削実施。19～25日 作業員を導入し、遺物包含層調査並びに遺構調査実施。26・27日 4区の埋め戻し作業実施。29・30日 プレハブ、トイレ等の施設の撤収を行い、現地調査の全てを終了する。

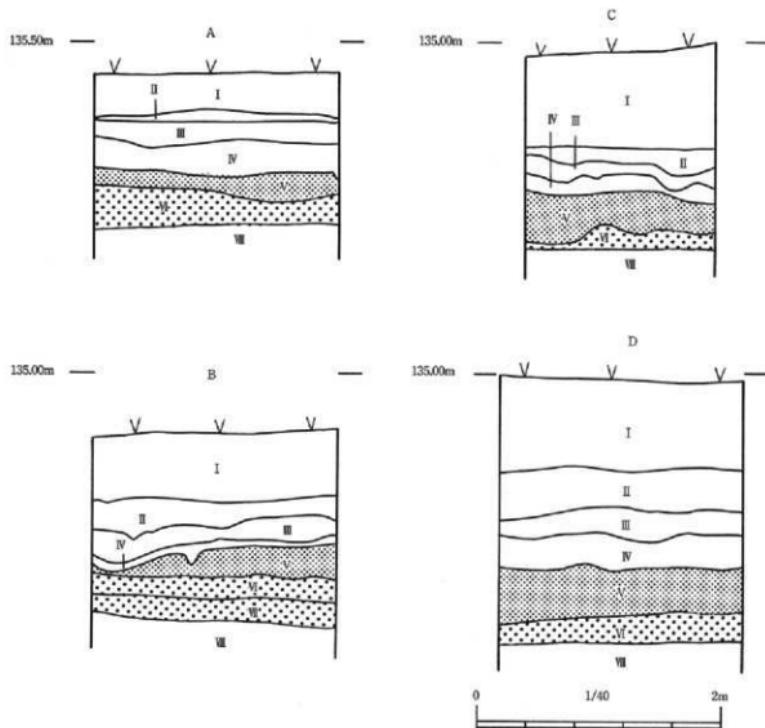
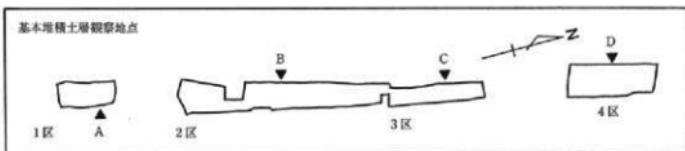
### 第3節 調査区と基本堆積土層（第4図）

調査区は、山形西高敷地内遺跡第1次から第6次調査区の北西方向に位置する東西約4～7m、南北約98mの帯状の範囲である。

基本堆積土層の観察は、4地点（A～D）で実施した。その結果、基本的な堆積は各地点において概ね同様であり、地表面から地山までは6層または7層に分層可能である。遺物包含層は、現地表下80～160cmで古代の層（V層）、その20～40cm下で縄文時代中期末葉の層（VI・VII層）が調査区全域に渡り確認された。遺構確認面は古代がVI層上面、縄文時代がⅦ層（地山）上面である。地表面から地山までの深度は、1区で130cm、2区で150cm、3区で170cm、4区で220cmを測り、調査区の南側から北側に向かって深くなっている。

本遺跡は、従来までの調査によって下層が縄文時代中期末葉、中層が古墳時代前期、上層が古代の集落跡の遺構面を持つ事が判明している。それに加えて中層から下層の間には、縄文時代晚期、弥生時代中期の遺構群も確認され、県内では貴重な重層的複合遺跡となっている。

今回の調査区では、前述のとおり上層に古代の遺物包含層と遺構、下層に縄文時代中期末葉の遺物包含層と遺構が検出された。



#### 基本堆積土層

I層 表土層  
II層 棕褐色砂質土  
III層 暗褐色砂質土  
IV層 暗褐色砂質土  
V層 黑褐色砂質土  
VI層 暗褐色砂質土  
VII層 黑褐色砂質土  
Ⅷ層 黃色褐色砂質土

近現代の整地・整土層  
無遺物層  
無遺物層 結石有り  
無遺物層  
古代遺物包含層  
縄文時代遺物包含層 上面は古代遺物包含層  
縄文時代遺物包含層  
縄文時代遺物包含層  
縄文時代遺物包含層 (地山)

第4図 基本堆積土層図

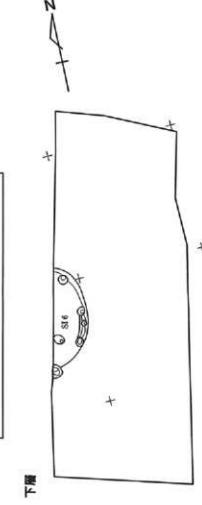
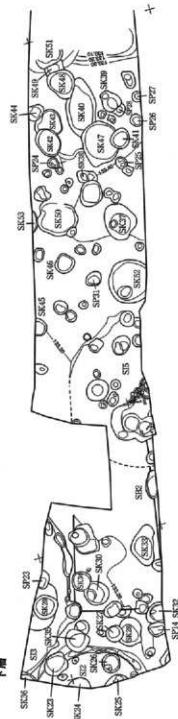
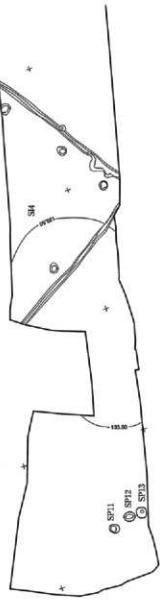
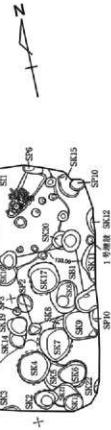
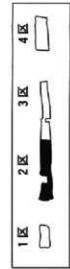


図5 滅菌室

## 第4章 検出された遺構と遺物

### 第1節 遺跡の概要

調査の結果、下層に縄文時代中期末葉の竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡2棟、河遺跡1条、土坑56基、ピット20基、埋設土器2基、上層に古代の竪穴住居跡1軒、ピット3基が検出された。主体となるのは縄文時代中期末葉の集落跡であり、古代の遺構・遺物は少量であった。また、竪穴住居跡と掘立柱建物跡については、調査区域の関係上、遺構全体を調査できたものが少なく、規模・平面形式等については不明瞭な点が多い。

### 第2節 縄文時代の遺構と遺物

#### 1 竪穴住居跡

##### S I 1 (第6図、図版2)

1区北側、V2グリッドに位置し、東側約半分を調査した。平面プランは隅丸方形と考えられるが、全体的に歪んでいる。規模は東西検出径2.95m、南北検出径3.98m、深さ15cmで、覆土は3層に分かれる。柱穴は周壁に沿うP1~4と、屋内に不規則に配置されたP5~9が該当すると考えられる。

複式炉が住居跡の北壁に近接して付設されている。炉は土器埋設石凹部、敷石石組部、前庭部の三部分より構成され、埋設土器は完形を留めている。規模は長径1.85m、短径0.75mで、炉の中軸線はN-134°-Wを示す。埋設土器の掘形は、土器形状に密着した形で掘り込まれ、土器周縁は被熱によって赤色酸化している。前庭部の平面プランは略台形で、床面からの掘り込みは約35cm前後である。また、各部位の土層観察では、覆土中に炭化物、焼土、灰等の混入は見られなかった。

遺物は、複式炉とその周辺から、中期末葉の大木10式中段階（菅原1999）に比定される土器と石器が出土している。1は複式炉に埋設されていた粗製土器である。鉢形を呈するもので、口縁が鋭角に内側へ折れる器形となる。器面全体に単筋LR縄文が縱方向に施文される。2~5は深鉢である。2・3は胴部上半に雁又文が施文されるもので、2は稜線区画の無文部、3は稜沈線区画の無文部によって描出される。4は胴部中位に小波状の稜線が廻り、胴部上半の文様帯と下半の縄文帯とを区画している。文様は、稜線により2個一対の縱位梢円文が描かれる。5は小型品で、胴部中位に沈線が廻っている。6は鉢形を呈するもので、稜線区画の無文部により体部上半に文様が描出される。7は石錐である。つまみ状の頭部をもつもので錐部は短い。

##### S I 2 (第7図、図版2)

2区南側、S3グリッドに位置し、北側約1/3を調査した。平面プランは略円形と考えられる。SK23~26・36と重複し、新旧関係は本遺構よりSK23・25・35が新しい。規模は東西検出径4.30m、南北検出径1.65m、深さ20cmで、覆土は3層に分かれる。周溝は西端で途切れしており、規模は幅20~38cm、深さ10~15cmである。柱穴は、周壁に沿って配置されたP1~4が該当すると思われる。

遺物は、覆土中から縄文土器の細片が出土している。

##### S I 3 (第7図、図版3)

2区南側、S3グリッドに位置し、東側を部分的に調査した。南壁はS I 2と近接している。平面プラン

は略円形と考えられるが不明瞭であり、S K29、S P23、S B2が本道構を切り込んでいる。規模は東西検出径1.35m、南北検出径6.45m、深さ15~20cmで、覆土は単層として捉えた。周溝は部分的に巡り、規模は幅15~25cm、深さ25cmである。調査した範囲では柱穴は確認されなかったが、周溝内に深さ約25cmの柱穴状のピット（P 1）が確認されている。炉は確認されていない。

遺物は、大木10式新段階に比定される土器が出土している。8・9は深鉢である。8は波状口縁になるもので、稜沈線区画の無文部により玉抱き文などの文様が描出される。9は撚糸文を地文とする粗製土器である。口縁部と胴部下端に無文帶をもち、それぞれ沈線と稜線によって区画されている。

#### S I 5 (第8図、図版3)

2区南側、R 3・4グリッドに位置し、西側約半分を調査した。遺構の掘り込みが浅いため、平面プランは判然としないが、規模は径6m前後と推測される。柱穴は周壁に沿うP 1~3と、それに弧状に連なるP 4・5が該当すると思われる。P 6・7は主柱穴であろうか。

複式炉が住居跡の南側に付設されている。調査が実施されたのは炉の西側約半分であるが、基本的に土器埋設石團部、敷石石組部、前庭部の三部分より構成されている。また、前庭部はS B2などが複雑に重複しており、平面プランは判然としない。規模は長径1.95m、短径0.90m前後と推測され、炉の中軸線はN-35°-Eを示す。埋設土器の掘形は、S I 1に比して一回り大きく掘り込まれ、土器周縁は被熱によって赤色酸化している。埋設土器の覆土は黒褐色砂質土の単層であり、炭化物、焼土、灰等の混入は見られなかつた。

遺物は、大木10式中段階に比定される土器と石器が出土している。10・11は深鉢である。10は複式炉に埋設されていた粗製土器である。器面全体に無節L繩文が縱方向に施文される。底部を欠損する。11は波状口縁になるもので、波頂部下に橋状の把手が斜めに付く。文様は稜線区画の無文部によって描出され、文様の区画内には棒状工具による刺突文が施される。口縁部内外面の無文部に赤彩がみとめられる。12は注口土器もしくは浅鉢である。稜線区画の無文部により横位格円文などが描かれる。13は磨石である。やや扁平な円盤を利用したもので、片面に磨痕がみられる。

#### S I 6 (第9図、図版3)

4区中央、F 6グリッドに位置し、西側約1/3を調査した。平面プランは円形と考えられ、規模は東西検出径2.05m、南北検出径6.10m、深さ20cmである。柱穴は周壁に沿って配置されたP 1~5が該当すると考えられ、周溝はそのP 2~4を繋ぐ様に部分的に設けられている。覆土は黒褐色砂質土の単層であり、床面は概ね平坦である。

遺物は、大木10式中段階に比定される土器が出土している。14は注口土器である。稜線区画の無文部により横位格円文が描出される。

## 2 掘立柱建物跡

#### S B 1 (第9図、図版3)

1区中央、W 3グリッドに位置する。東西1間、南北1間の建物跡で、南北軸はN-9°-Wを示す。柱間寸法は東西長2.65m、南北長2.70mである。S I 1と重複しているが、新旧関係は不明瞭である。柱掘形は略円形平面で、規模は径50~85cm、深さ60~70cmと一定していない。P 1・3の土層断面では径20~30cmの柱痕跡が確認され、埋土は暗褐色砂質土と褐色砂質土の互層堆積を成している。また、P 4では柱根を固定したと思われる根固石が詰め込まれている。

遺物は、P 5 の西側から大木10式中段階に比定される土器が出土している。15は深鉢である。縁線区画の無文部により波瀧文が描出されるもので、胸部下端は無文帯となる。

#### S B 2 (第10図、図版3)

2 区南側、S 3 グリッドに位置し、P 6 が S I 3 を切り込んでいる。部分的な検出のため平面形式は不明瞭であるが、確認される限りでは南北に長い東西2間、南北2間の建物跡である。柱間寸法は P 4 ~ 6 は約1.5mの等間であるが、P 1 ~ 3 は2.4~3.2mと不揃いである。柱掘形は略円形平面で、規模は径50~95cm、深さ50~95cmと一定していない。また、P 2 の土層断面では2本の柱痕が確認され、P 1・6・7 には根石や根固石が詰め込まれている。

遺物は、細片のため図示していないが、P 7 から大木10式中段階に比定される注口土器が出土している。

### 3 河道跡

#### S D 1 (第11図)

2 区北側、P 4 グリッドに位置する。基本層序VI層を除去した段階で検出された縄文時代中期の河道跡である。調査区を横断し、流路は東西方向にとるものと思われる。掘り下げ調査は、1 m幅のトレーナーを設定して実施した。

規模は幅6.30m、深さ1.12mである。断面形は緩やかな船底状を呈し、底面は概ね平坦である。覆土は18層に分かれる自然堆積土で、底面直上の18層には縄文時代の土器細片が少量含まれていた。

### 4 土坑とピット

土坑とピットに関しては、全体を別表1にまとめ、特徴的かつ出土遺物があったものを記する。また、ピットの中には一部、柱痕跡も確認されているが、建物として組むには至らなかった。

#### S K 1 (第11図、図版4)

1 区南端、W 2 グリッドに位置し、S K21を切り込んでいる。平面プランは円形で、規模は長径75cm、短径65cm、深さ46cmである。

#### S K 2 (第11図、図版4)

1 区南端、W 2 グリッドに位置し、S K21を切り込んでいる。平面プランは梢円形で、開口部の近くに段を有し、壁面下端は僅かにオーバーハングしている。規模は長径96cm、短径73cm、深さ75cmで、底面は僅かに起伏する。

#### S K 4 (第12図、図版4)

1 区南側、W 1 ~ 2 グリッドに位置し、S K 5 を切り込んでいる。平面プランは円形で、壁面下端は5~10cmオーバーハングしている。規模は長径130cm、短径123cm、深さ33cmで、底面は僅かに起伏している。

#### S K 5 (第12図、図版4)

1 区南側、W 2 グリッドに位置する。S K 4・6 に切り込まれ、平面形、規模は判然としない。深さは18cmと浅く、覆土は3層に分かれれる。

#### S K 6 (第12図)

1 区南側、W 2 グリッドに位置し、S K 5 を切り込んでいる。平面プランは梢円形で、規模は長径112cm、短径92cm、深さ23cmである。壁面下端は西側を除き約5~10cmオーバーハングしている。

#### S K 7 (第11図、図版4)

1区南側、W2グリッドに位置し、SK9に切り込まれている。平面プランは略円形で、壁中位は10~15cm抉れている。規模は長径135cm、短径125cm、深さ53cmで、底面は平坦である。覆土は3層に分かれ。遺物は、東側の壁際から口縁部と底部を欠く深鉢(22)が1点、正位で出土している。

SK9 (第12図、図版4)

1区南側、W2グリッドに位置し、SK10・18、P5に切り込まれている。平面プランは隅丸方形で、規模は長径124cm、短径118cm、深さ25cmである。底面直上から土器が纏まって出土している。

SK21 (第11図、図版4)

1区南端、W2グリッドに位置する。SK1・2に切り込まれ、平面プランは判然としない。規模は長径101cm、短径54cm、深さ36cmで、覆土は4層に分かれ。

SK54 (第12図、図版4)

3区中央、L~M4グリッドに位置し、西側約半分を調査した。平面プランは円形と考えられ、規模は東西検出径100cm、南北検出径180cm、深さ95cmである。壁面下端は僅かにオーバーハングしている。

SK56 (第12図、図版4)

3区北側、J5グリッドに位置し、北側約2/3を調査した。平面プランは円形と考えられ、規模は東西検出径180cm、南北検出径120cm、深さ35cmである。また、2号埋設土器が北壁に沿った位置に、本遺構を切り込んで構築されている。

出土遺物 (第15・16図、図版7・8)

SK4 16~18は稜線区画の無文部により文様が描出されるものである。16は口縁が鋭角に内側へ折れる器形を呈する。胴部上半に丸みを帯びた方形区画文と思われる文様が描かれており、区画をなす右側の稜線は斜め上方へ延びて口唇部まで達している。17は方形区画文と思われる文様が描かれる。18は文様末端部がヒレ状を呈するものである。19は土製円盤である。

SK5 20は稜線区画の無文部により波濤文が描出される。

SK6 21は沈線区画の無文部により文様が描出される。

SK7 22は稜沈線区画の無文部により玉抱き文などが描かれるもので、文様連結部はヒレ状を呈する。無文部には赤彩が施される。一部区画内には棒状工具による刺突文が施される。文様は3単位で、無文部には赤彩が施される。

SK9 23は稜沈線区画の無文部により玉抱き文と思われる文様が描かれる。

SK11 24は稜沈線区画の無文部により方形区画文と思われる文様が描かれるもので、方形区画をなす右側の稜線は口唇部まで延びる。

SK20 25は注口土器である。稜線区画の無文部により横位格円文などが描かれる。

SK24 26は稜沈線区画の無文部により玉抱き文などが描かれるもので、文様連結部はヒレ状を呈する。27は沈線区画の無文部により波濤文に似た文様が描出される。

SK42 28は稜線区画の無文部により文様が描出されるものである。29は用途・部位不明の土製品である。細片のため全貌は不明であるが、中空の半球形を呈するものと思われる。器面全体に竹管状工具による円形刺突文が施される。

SK47 30は台付鉢である。台部には縱位格円形の透かし孔が3箇所配される。

SK50 31は稜線区画の無文部により文様が描出されるもので、文様末端部はヒレ状を呈する。32は土製円盤である。

**S K52** 33は稜線区画の無文部により波渦文が描かれる。34は注口土器である。注口部直下には棒状工具による刺突文が施される。

**S K54** 35は稜線区画の無文部により文様が描出されるもので、文様末端部はヒレ状を呈する。器面には棒状工具による刺突文が施される。無文部には赤彩が施される。36・37は土製円盤である。

**S K56** 38は鉢形を呈する小型品である。沈線区画の無文部により波渦文が描かれる。

## 5 埋設土器

### 1号埋設土器（第12図、図版4）

1区、W 2グリッドに位置する。基本層序VI層を除去する過程で、土器の上端が確認された。地山面での確認状況は、深鉢はやや東側に傾くものの正位で据えられ、胴部上半が地上に露出していた。掘形は器形に密着した様に掘り込まれ、埋土は黒褐色砂質土の単層である。

また、この深鉢（40）の中には一回り小さい深鉢（39）が正位で入れ子状に入っていた。

39は4単位の波状口縁をもつ深鉢である。波頂部には小孔が1箇所穿たれる。胴部上半に文様帶をもち、稜線区画の無文部により玉抱き文や円形文などが描出される。文様の一部区画内には棒状工具による刺突文が施される。無文部には赤彩が施される。波頂部先端は4箇所とも欠損しており、入れ子状に納める際に意図的に打ち欠いたものと思われる。40は単節LR繩文を地文とする粗製土器である。底部を欠損する。ともに大木10式中～新段階に比定されるものと考えられる。

### 2号埋設土器（第12図、図版4）

3区、L 5グリッドに位置する。1号埋設土器と同様、基本層序VI層を除去する過程で、土器の上端が確認された。S K56の埋没の後、同遺構の北側部分を掘り込んで構築されている。地山面での確認状況は、深鉢（41）はやや南側に傾くものの正位で据えられ、胴部上半が地上に露出していた。掘形は器形に密着した様に掘り込まれ、埋土は暗褐色砂質土である。

41は単節繩文を地文とする粗製土器である。底部中央には小孔が穿たれる。

## 6 下層遺物包含層（第17～19図、図版9・10）

42～53は繩文土器である。42は稜線区画の無文部により波渦文が描かれる。43は波渦文と思われる文様が稜沈線区画の無文部により描出される。44は稜線区画の無文部により雁又文が描かれる。45は胴部上半に稜線による把手状の円形文を4単位配する。頭部には稜線区画による狭い無文帯が廻る。46～48は棒状あるいは鋭利なヘラ先状工具により刺突文が施されるものである。49・50は沈線区画の無文部により文様が描出されるものである。49は胴部上半に方形区画文、中位に玉抱き文が描かれる。50は同じく方形区画文が描かれるものであるが、方形区画をなす右側の沈線がほぼ垂直に延びて口唇部直下まで達している。区画内には撚糸文が施される。51は稜線区画の無文部により丸みを帯びた方形区画文が描出されるものである。50と同様、方形区画をなす右側の稜線が口唇部直下まで延びる。52は波状口縁となるもので、波頂部には横位梢円形の小孔が1箇所穿たれる。文様は稜線区画の無文部により描出される。53は単節RL繩文を地文にもつ小型品である。

54は用途・部位不明の土製品である。破片のため全貌は不明であるが、現状で中空の半球形を呈するものである。器面全体に竹管状工具による円形刺突文が施される。

55～61は石器である。55～58は不定形石器である。いずれも縦長削片を素材とし、片面加工によって側縁

に刃部を作出するものである。その形状からサイド・スクレイバー的な機能が想定される。55は正面の一部に自然面を残すもので、一部両面加工が施される。59は綾長削片である。刃部の二次加工はないが、側縁に使用痕と推定される痕跡がみとめられる。いずれも石材は珪質頁岩である。60は定角式の磨製石斧である。ほぼ中央で折損する。61は石皿である。使用面には筋状の擦痕がみられ、底部外面には多数の凹痕がみとめられる。

### 第3節 古代の遺構と遺物

#### 1 堪穴住居跡

##### S 1 4 (第20図、図版3)

2区南側、Q 3 グリッドに位置し、基本層VI層上面で検出された。平面プランは方形と考えられ、北東壁での方向はN-30°-Wを示す。カマドは検出されていないが、幅20~25cm、深さ15~20cmの周溝が巡っている。規模は北東壁で6.10m、南東壁で6.05mを測る。柱穴はP 1~4 が該当すると考えられ、P 2・3の底面には根石が詰め込まれている。

遺物は、床面上から赤焼土器壺が2点(62・63)出土している。62・63は、ほぼ同様の器形を呈するものである。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。底部は回転糸切り未調整である。胎土に灰白色の礫 $\phi$ 1~3 mmを含み、器面には焼成時の石爆ぜが目立つ。9世紀第4四半期~10世紀第1四半期頃の製品と思われる。

#### 2 ピット

##### S P 11

2区、S 3 グリッドに位置する。径30cm、深さ35cmの柱穴状の円形ピットである。径15cmの柱痕が確認されており、柱の「あたり」部分は一段低くなっている。遺物は出土していない。

##### S P 12

2区、S 3 グリッドに位置する。径45cm、深さ38cmの円形ピットである。覆土は3層に分かれる自然堆積土である。遺物は出土していない。

##### S P 13

2区、S 3 グリッドに位置する。径30cm、深さ24cmの円形ピットである。径20cmの柱痕が確認された。遺物は出土していない。

#### 3 上層遺物包含層 (第20図、図版10)

64は須恵器壺である。底部は回転糸切り未調整である

## 第5章 まとめ

調査では、現地表下80~160cmで古代の層、その20~40cm下で縄文時代中期末葉の層を確認し、2面の調査を実施した。その結果、下層では堪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡2棟、河道跡1条、土坑56基、ピット20基、埋設土器2基、上層では堪穴住居跡1軒、ピット3基が検出されている。

主体となるのは縄文時代中期末葉の集落跡で、土器は大木10式（中・新段階）のものがほとんどである。また、1号埋設土器は、底部を欠損した大型の深鉢形土器の中に、文様帶に赤彩を施した小型の深鉢形土器が入れ子状で出土している。

縄文時代の遺構と遺物の分布状況は、概して河道跡（S D 1）を境とし、南側に漸く北側に向かって薄くなっている。

#### 下層の遺構

堅穴住居跡は、いずれも部分的な検出のため平面形態については不明瞭であるが、S I 1・5の柱配置では、幾本かの主柱に加えて周壁に沿う壁柱を複数配置している。また、同遺構には複式炉が付設されている。炉は土器埋設石圓部、敷石石組部、前庭部の三部分より構成され、各部位で最も熱作用を受けているのは埋設土器の掘形前方部で、次に敷石石組部の奥壁周辺であった。この土層観察では炭化物、焼土、灰等の混入は皆無に等しく、その使用過程が注目される。

掘立柱建物跡は2棟として報告したが、他にも少数ながら柱痕跡や川原石を詰め込んだビットが確認されており、更に建物跡が存在している可能性が高い。このビット内の川原石は、正面や底面に詰め込まれており、機能的には柱根を固定した根固石、地盤沈下防止等の根石と考えられる。

土坑は当初58基としたが、その中の2基については、前述した掘立柱建物の一部を構成するものとして取り扱った。土坑の断面形は「コ」字状のものが主体であるが、正面下端が上面径に比して約10~15cm程度オーバーハングしている「袋状」ものが4基あり、その中にはSK7の様に壁中位に最大径を持つ特異な形態も確認されている。

埋設土器は2基が検出されている。いずれも単独で存在し、土器掘形は比較的小さく、土器はやや頗るもの、正位である。前述のとおり1号埋設では、大型の粗製深鉢形土器の中に小型の精製深鉢形土器を入れ子状に出土しており、2号埋設を含めてリン酸分析を実施した。その結果、1号埋設の小型深鉢形土器の底部からは、天然賦存量の上限を越えるリン酸量が検出され、本土器が遺体の埋納に使用された可能性が高いことが判明した。2号埋設では、1号埋設に比べ低い数値のリン酸量しか検出されなかつたが、土器底部には径2.5~3cmの孔が穿たれていることから、この数値は地山土の影響を受けた可能性が指摘されている。

#### 上層の遺構

上層では、9世紀第4四半期~10世紀第1四半期頃の赤燒土器壙を伴う堅穴住居跡1軒と、柱穴状のビット3基の検出に留まった。しかし、今回の調査によって、特に南北方向における古代集落の範囲を確認できたことは大きな成果であった。

#### 引用・参考文献

- 山形県教育委員会 1973 「山形西高敷地内遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第17集  
山形県教育委員会・山形市教育委員会 1979 「熊ノ森遺跡第Ⅳ次発掘調査概報」  
阿部明彦・水戸弘美 1999 「山形県の古代土器編年」「第25回古代城柵官街遺跡検討会資料」  
第25回古代城柵官街遺跡検討会事務局  
菅原哲文 1999 「山形県における縄文時代中期の土器様相—中期後半の編年を中心として—」  
『山形考古』第6巻第3号（通巻29号） 山形考古学会  
(財)山形県埋蔵文化財センター 2003 「山形西高敷地内遺跡—第6次発掘調査報告書—」  
山形県埋蔵文化財センター調査報告書第117集

## 付章 自然科学分析

山形西高敷地内遺跡出土埋甕の内容物について

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

今回は山形西高敷地内遺跡より出土した縄文時代中期の埋設土器 2 基（1 号埋設、2 号埋設）について、自然科学分析により遺体埋納の痕跡の調査を行う。

遺体痕跡の最も有力な情報は、深鉢の覆土中に骨などの遺体そのものを検出することである。しかし、わが国のような気候や土壤条件では、遺体が長い年月その形状を保つことは稀である。したがって、遺体が検出されない場合の検証方法として、土壤中の化学成分の特徴から遺体痕跡を推定する方法がよくとられる。人体特に人骨に多量に含まれるリン酸は、その特徴的な濃集状態から遺体の痕跡を定性的に推定する代表的な成分であり、すでに資料の蓄積も豊富である。そこで、本分析においても覆土中のリン酸含量を調査することで遺体痕跡を検証する。

### 1. 試料

試料は、1 号埋設、2 号埋設内の覆土それぞれを深鉢の中心部から約 10×10cm 四方で、深鉢の底部方向に厚さ 5 cm で連続的に採取した。なお、1 号深鉢内部にはもう一個体の小型の深鉢が存在しており、試料はその深鉢内覆土（試料番号 1-1～6）と深鉢を取り除いた後の 1 号深鉢底部に堆積する覆土（試料番号 1-7）を採取した。試料の採取位置及び状態について表 1 に示す。

表 1. 分析試料

対象遺物	試料採取位置	試料番号	供試試料	試料の状態				
				乾燥	土性	土色	アルミ反応	その他
1 号埋設	0~5cm	1-1	乾燥	L	IORYR2/2	黒褐色	++	
	5~10cm	1-2	○	半乾	IORYR2/2	黒褐色	++	
	10~15cm	1-3		半乾	IORYR2/2	黒褐色	++	
	15~20cm	1-4	○	半乾	IORYR2/2	黒褐色	++	
	20~25cm	1-5		半乾	IORYR2/2	黒褐色	++	
	25~30cm	1-6	○	半乾	IORYR2/2	黒褐色	++	
	最下層	1-7	○	乾燥	L	IORYR2/2	黒褐色	++
2 号埋設	0~5cm	2-1	湿潤	CL	IORYR2/1	黒褐色	++	
	5~10cm	2-2	○	湿潤	CL	IORYR2/1	黒褐色	++
	10~15cm	2-3		湿潤	CL	IORYR2/1	黒褐色	++
	15~20cm	2-4	○	湿潤	CL	IORYR2/1	黒褐色	++
	20~25cm	2-5		湿潤	CL	IORYR2/1	黒褐色	++
	25~30cm	2-6	○	湿潤	CL	IORYR2/1	黒褐色	++
	30~35cm	2-7		湿潤	CL	IORYR2/1	黒褐色	++
	35~40cm	2-8	○	湿潤	CL	IORYR2/1	黒褐色	++
	40~45cm	2-9		湿潤	CL	IORYR2/1	黒褐色	++
	45~50cm	2-10	○	湿潤	CL	IORYR2/1	黒褐色	++
	50~55cm	2-11		湿潤	CL	IORYR2/1	黒褐色	++

注：(1)試料採取位置：深鉢内の覆土を最表面を 0 cm として 5 cm ピッチで最下部まで掘進して得た際の深度で表示。

(2)1 号深鉢最下部は、もう一つ深鉢が入れ子状態で存在しており、その深鉢を取り除いた後の 1 号深鉢底に堆積する覆土。

(3)試料番号：採取試料番号にパリノ・サーヴェイ㈱が付けた番号。

(4)供試試料：分析に供した試料を○で表示。

(5)試料の状態：覆土試料採取時の各試料の状態を表示。

(6)乾燥度：試料採取時の土壤水分状態を表示（土壤調査ハンドブック、1984）。

半乾：水を強く握っているが、土塊を強く握ったときに、溼り気を感じない。

乾：土塊を強く握ると手のひらがぬれるが水は絡まない。親指と人差し指で強く押すと水がじみ出る。

(7)土性：試料採取時の砂、シルト、粘土の割合を土性として表示（土壤調査ハンドブック、1984）。

L...：砂質（粘土 0~15%、シルト 20~45%、砂 40~65%）

CL...：泥質（粘土 15~25%、シルト 20~45%、砂 3%~65%）

(8)土色：試料採取時の土色を表示（新原色標準土色範囲、1987）。

(9)アルミ反応：土壤中に含まれる活性アルミニウムの存在を加えるための呈色反応試験。

++...：同時鮮明に呈色。

1号埋設では7点（試料番号1-1～1-7）、2号埋設では11点（試料番号2-1～2-11）を採取し、分析試料は1号埋設4点（試料番号1-2、1-4、1-6、1-7）、2号埋設5点（試料番号2-2、2-4、2-6、2-8、2-10）の合計9点とした。採取した試料は、1号埋設土、2号埋設土それぞれに土質は均一であるが、1号埋設覆土のほうがやや水分が少なく、土性は粘土分が少なく砂分が多い。両覆土共通して活性アルミニウムの反応が認められ、リン酸を固定しやすい性質が認められる。

## 2. 分析方法

リン分析は、硝酸・過塩素酸分解ーバナドモリブデン比色法により行う（土壤養分測定法委員会、1981）。以下に各項目の具体的な操作工程を示す。

試料を風乾後、軽く粉碎して2.00mmの篩を通して（風乾細土）。風乾細土の水分を加熱減量法（105°C、5時間）により測定する。風乾細土2.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、硝酸約5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後に水で定容すると同時にろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P2O5）濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりのリン酸含量（P2O5mg/g）を求める。

## 3. 結果及び考察

結果を表2に示す。わが国の土壤リン酸天然賦存量について、Bowen (1983)、Bolt & Bruggenwert (1980)、川崎ほか (1991)、天野ほか (1991)などの調査事例があり、これらの調査事例から推定される天然賦存量の上限は約3.0P2O5mg/g程度である（なお、各調査例の記載単位が異なるため、ここではすべてP2O5mg/gで統一している）。よって、この値を著しく越える土壤では人為的影響など外的要因によるリン酸成分の富化が指摘できる。今回の分析試料では、1号埋設の試料番号1-6において推定される天然賦存量の上限を上回る。また、この試料の採取位置が1号埋設内部の小型の深鉢底部から採取されていること、さらに上部の試料（試料番号1-2、試料番号1-4）よりも高い含量であることは、深鉢底部には外的要因によるリン酸富化が指摘できる。本深鉢は遺体を埋納したと考えられていることから、リン酸の富化は埋納された遺体に由来する可能性がある。なお、1号埋設本来の底部試料となる試料番号1-7ではリン酸含量が低い。これは、1号埋設は底部を欠損していることから、地山土の影響を受けたものと推測される。

一方、2号埋設では天然賦存量の上限を上回る試料は認められず、しかもリン酸含量の最も多い試料が埋設内部ではなく、表層の試料番号2-2である。そのため、分析結果からは、埋設内に外的要因によるリン酸富化は考えにくい。ただし、2号埋設についても底部を欠損していることから、1号埋設同様、地山土の影響を受けている可能性もある。

表2. リン分析結果

試料	試料番号	P2O5 (mg/g)
1号埋設	1-2	2.68
	1-4	2.86
	1-6	3.84
	1-7	1.37
2号埋設	2-2	2.82
	2-4	2.29
	2-6	1.68
	2-8	2.02
	2-10	2.20

## 引用文献

- 天野 洋司・太田 健・草場 敬・中井 信、1991、中部日本以北の土壤型別蓄積リンの形態別計量、農林水産省農林水産技術会議事務局（編）、土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発、28-36。  
Bowen, H. J. M., 1979, Environmental Chemistry of Elements [浅見 輝男・茅野 充男（訳）, 1983, 環境無機化学 -元素の循環と生化学- 博友社, 297p.]  
Bolt, G. H. & Bruggenwert, M.G.M. 1976, SOIL CHEMISTRY. [岩田 進午・三輪 審太郎・井上 隆弘・陽

- 捷行(訳), 1980, 土壤の化学, 学会出版センター, 235-236.
- 土壤養分測定法委員会(編), 1981. 土壤養分分析法. 畜産堂, 440p.
- 川崎 弘・吉田 淳・井上 恒久, 1991, 九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量. 農林水産省農林水産技術会議事務局(編), 土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発, 23-27.
- 農林省農林水産技術会議事務局(監修), 1967, 新版標準土色帖.
- ペドロジスト懇談会(編), 1984, 土壤調査ハンドブック. 博友社, 156p.

別表1 土坑・ピット観察表

\*計測値( )内の数値は、検出径を示す。

遺構No	出土位置 (グリッド)	平面形状	計測値(cm)			新旧関係・備考	時期
			長径	短径	深さ		
S K1	W 2	円形	75	(65)	46		
S K2	W 2	楕円形	96	73	75	S K21を切る	
S K3	W 1	不明瞭	(64)	(18)	19		
S K4	W 1 ~ 2	円形	130	123	33	SK 5を切る。壁面下端がオーバーハングしている	大木10式新
S K5	W 2	不明瞭	—	—	18	S K 4・6に切られる	大木10式中
S K6	W 2	楕円形	112	92	23	壁面下端がオーバーハングしている	大木10式新
S K7	W 2	円形	135	125	53	壁面中位がオーバーハングしている	大木10式新
S K8	W 2	不明瞭	(49)	(40)	5		
S K9	W 2	隅丸方形	124	118	25	S K10・18, SP 5に切られる	大木10式新
S K10	W 2	不明瞭	(80)	(33)	8	S B 1 の P 1 に切られる	
S K11	V・W 2	不明瞭	(170)	(53)	45		大木10式新
S K12	V 2	不明瞭	(96)	(25)	40		
S K13	—	—	—	—	—	S B 1 の P 4	
S K14	W 1 ~ 2	略円形	120	65	45	S K19に切られる	
S K15	V 2	楕円形	110	(50)	18	S P10に切られる	
S K16	V 1 ~ 2	円形	68	60	65	S B 1 の P 3 に切られる	大木10式中
S K17	V・W 2	円形	125	115	47	壁面下端がオーバーハングしている	
S K18	V・W 2	楕円形	(105)	78	32		
S K19	V・W 2	円形	86	73	60	柱痕跡を確認	
S K20	V 2	円形	70	70	54	S B 1 の P 4 に切られる	大木10式中
S K21	W 2	不明瞭	(101)	(54)	36	S K1・2に切られる	
S K22	W 2	不明瞭	(50)	(15)	6		
S K23	S 2	略円形	80	80	54	SI 2と重複するが新旧関係不明	
S K24	T 2 ~ 3	不明瞭	94	(40)	16		大木10式新
S K25	T 3	不明瞭	(75)	(30)	26	S I 2を切り込む	
S K26	S・T 3	円形	75	70	46	SI 2と重複するが新旧関係不明	
S K27	S 3	円形	70	(65)	73	S K28を切る	
S K28	S 3	円形	115	(80)	87	柱痕跡を確認	
S K29	S 2 ~ 3	円形	100	95	27	S I 3を切る	大木10式新
S K30	S 3	円形	(90)	90	66	SK34と重複するが新旧関係不明	
S K31	—	—	—	—	—	S B 2 の P 7	
S K32	S 3	楕円形	120	60	67		
S K33	S・R 3	不定形	140	90	67		大木10式新
S K34	S 3	円形	80	(80)	59		
S K35	S 3	円形	(110)	(110)	24	S I 2を切る	
S K36	S 2	不明瞭	—	—	7		
S K37	P 4	略円形	143	140	91		大木10式新
S K38	P 4	略方形	80	(50)	32		

遺構No	出土位置 (グリッド)	平面形状	計測値 (cm)			新旧関係・備考	時期
			長径	短径	深さ		
S K39	O 4	不定形	100	65	56		
S K40	O 4	不定形	200	130	23	S K47・48に切られる	
S K41	O・P 4	円形	75	74	17	S K47を切る	
S K42	O 3～4	椭円形	120	90	42	S K43を切る	大木10式新
S K43	O 3～4	略円形	110	105	35	S K44を切る	
S K44	O 3	略円形	70	(60)	16		
S K45	Q 3	略円形	70	(50)	44		
S K46	P 3	円形	70	70	29		
S K47	O・P 4	円形	168	(111)	85		大木10式
S K48	O 4	椭円形	118	90	73		
S K49	O 4	不明瞭	115	(100)	51		
S K50	P 3	略円形	(160)	(120)	23		大木10式新
S K51	O 4	略方形	110	(100)			
S K52	P・Q 3～4	円形	(125)	(125)	47		大木10式中
S K53	P 3	不明	(70)	(20)	31		
S K54	L・M 4	円形	180	(100)	95	壁面下端がオーバーハングしている	大木10式新
S K55	L 4～5	略円形	160	155	27		
S K56	K 5	不明瞭	(180)	(120)	35	2号埋設土器が切り込んでいる	大木10式中
S K57	J 5	略円形	180	(140)	33		大木10式新
S K58	J 5	略円形	120	(68)	22		
S P 1	—	—	—	—	—	S B 1のP 2	
S P 2	V・W 2	椭円形	31	57	32		
S P 3	W 1～2	円形	31	29	38		
S P 4	V 2	略円形	21	18	25	S B 1のP 3	
S P 5	—	—	—	—	—	S B 1のP 1	
S P 6	V 2	不明瞭	74	(28)	49	S I 1を切る	
S P 7	V 2	円形	37	(32)	58		
S P 8	—	—	—	—	—	S I 1のP 4	
S P 9	V 2	円形	43	35	35	S I 1のP 2	
S P 10	V 2	椭円形	(55)	51	52	S K15を切る	
S P 11	S 3	略円形	39	38	67		古代
S P 12	S 3	略円形	43	35	35		古代
S P 13	S 3	略円形	39	33	32		古代
S P 14	S 3	略円形	(58)	(53)	19		
S P 16	S 3	円形	113	58	61		
S P 17	—	—	—	—	—	S B 2のP 4	
S P 18	—	—	—	—	—	S B 2のP 5	
S P 19	—	—	—	—	—	S B 2のP 6	
S P 20	S 3	不明瞭	(37)	46	28		
S P 21	R 3～4	椭円形	110	(37)	46		
S P 22	—	—	—	—	—	S B 2のP 1	
S P 23	S 2～3	不明瞭	65	(36)	34		
S P 24	O・P 3	略円形	50	42	32		
S P 25	P 4	略円形	(47)	42	27		
S P 26	O 4	円形	50	44	39		
S P 27	O 4	円形	42	34	16		
S P 28	O 4	略円形	51	(36)	26		
S P 29	—	—	—	—	—	S I 4のP 2	
S P 30	Q 4	円形	63	55	38		
S P 31	P・Q 3～4	略円形	55	50	31		
S P 32	K 5	不定形	95	46	44		

別表2 遺物観察表

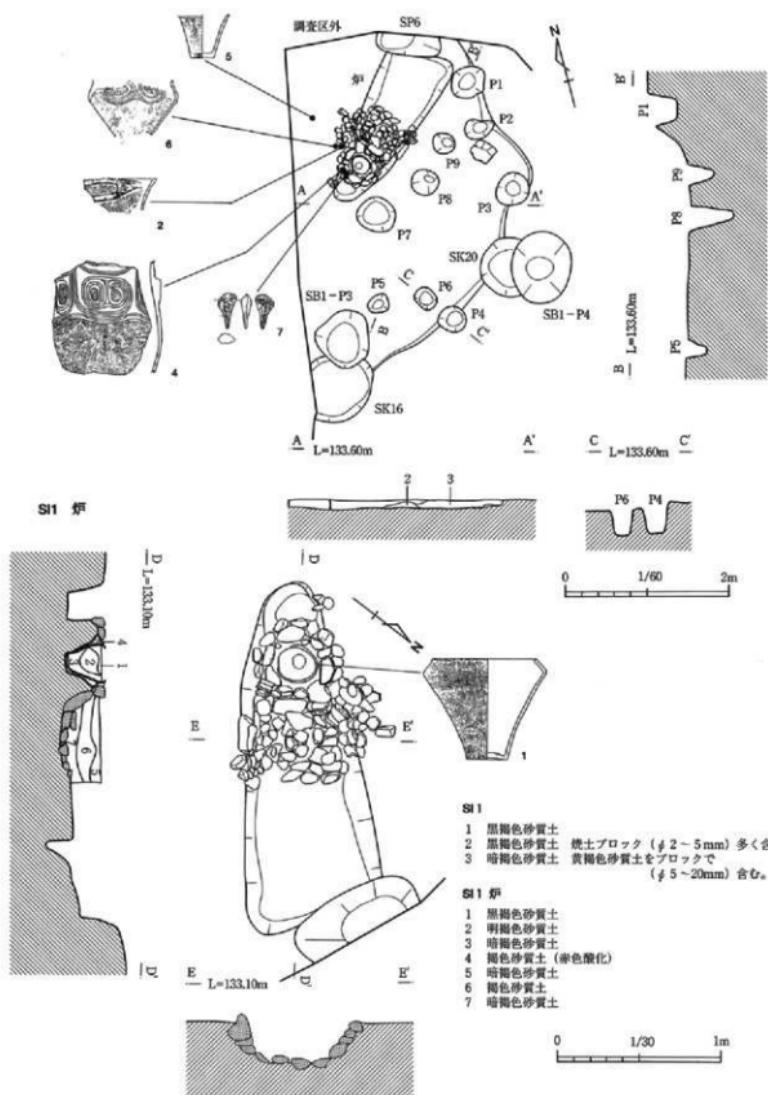
※〔 〕は残存値、( ) は復元推定値を示す。

No.	出土位置	種別	器種	計測値(cm)			文様・技法等の特徴	遺存部位	備考
				口径	底径	器高			
1	SI 1 墳壘炉	縄文土器	鉢	24.8	9.4	24.7	単節LR	完形	炉体土器
2	SI 1	縄文土器	深鉢	—	—	—	雁文又、後線区画の無文部、単節LR	口縁部片	
3	SI 1	縄文土器	深鉢	—	—	—	雁文又、後沈縫区画の無文部、単節RL	胴部片	
4	SI 1	縄文土器	深鉢	—	—	—	2個一对の縱位格円文、後線区画の無文部、単節RL	胴部片	
5	SI 1	縄文土器	深鉢	—	5.6	—	小型品、沈縫、単節LR	胴～底部	
6	SI 1	縄文土器	鉢	—	—	—	後線区画の無文部、単節LR	体部片	
7	SI 1	石器	石錐	長3.1、幅1.7、厚0.9、重27g、つまみ状の頭部をもち錐部は短い	—	—		完形	
8	SI 3	縄文土器	深鉢	—	—	—	波状口縁、玉指き文、後沈縫区画の無文部、単節	口～胴部片	
9	SI 3	縄文土器	深鉢	—	(9.2)	—	口縁部と胴部下端に無文帯、沈縫、稜縫区画、撓糸文	胴～底部	
10	SI 5 墳壘炉	縄文土器	深鉢	25.2	—	—	無節し、底部打ち欠き	底部欠損	炉体土器
11	SI 5	縄文土器	深鉢	—	—	—	波状口縁、横状把手、後線区画の無文部、口縁部の無文部赤彩、刺突文	口縁部片	
12	SI 5	縄文土器	注口土器	(20.8)	—	—	横位格円文、後線区画の無文部、単節LR	口～体部片	
13	SI 5	石器	磨石	長8.0、幅7.2、厚6.1、重454.9g、やや扁平な円錐、片面に磨痕あり	—	—		完形	
14	SI 6	縄文土器	注口土器	(29.0)	8.0	21.3	横位格円文、後線区画の無文部、単節LR	1/2	
15	SB 1	縄文土器	深鉢	(29.0)	6.6	20.9	波濤文、稜縫区画の無文部、胴部下端無文帯、単節LR	1/2	
16	SK 4	縄文土器	深鉢	(18.6)	—	—	方形区画文カ、稜縫区画の無文部、単節LR	口～胴部片	
17	SK 4	縄文土器	深鉢	—	—	—	方形区画文カ、稜縫区画の船文部、単節RL	口～胴部片	
18	SK 4	縄文土器	深鉢	—	—	—	文様末端部ヒレ状、後縫区画の無文部	胴部片	
19	SK 4	土製品	土製円盤	径3.6、厚0.8	—	—	単節	完形	
20	SK 5	縄文土器	深鉢	(19.6)	—	—	波濤文、後線区画の無文部、単節LR	1/3	
21	SK 6	縄文土器	深鉢	—	—	—	沈縫区画の無文部、単節RL	口～胴部片	
22	SK 7	縄文土器	深鉢	—	—	—	文様3単位、玉指き文、文様連結部ヒレ状、稜沈縫区画の無文部、無文部赤彩、刺突文、単節RL	口～底 底欠損	
23	SK 9	縄文土器	深鉢	—	—	—	後沈縫区画の無文部、単節	口～胴部片	
24	SK11	縄文土器	深鉢	—	—	—	方形区画文カ、稜沈縫区画の無文部、単節	口～胴部片	
25	SK20	縄文土器	注口土器	—	—	—	横位格円文、後縫区画の無文部、単節	注口部	
26	SK24	縄文土器	深鉢	—	—	—	玉指き文、文様連結部ヒレ状、稜沈縫区画の無文部、単節RL	胴部片	
27	SK24	縄文土器	深鉢	(26.4)	—	—	沈縫区画の無文部、単節	口～胴部	
28	SK42	縄文土器	深鉢	—	—	—	後縫区画の無文部	口縁部片	
29	SK42	土製品	用途不明品	—	—	—	中空の半球形を呈する、全面に円形刺突文	破片	
30	SK47	縄文土器	台付鉢	—	9.0	—	台部に縦位格円形の透かし孔3箇所、単節LR	底～台部	
31	SK50	縄文土器	深鉢	—	—	—	文様末端部ヒレ状、後縫区画の無文部、単節	胴部片	
32	SK50	土製品	土製円盤	径4.1、厚0.7	—	—	単節	完形	
33	SK52	縄文土器	深鉢	—	—	—	波濤文、後縫区画の無文部、単節LR	口～胴部片	
34	SK52	縄文土器	注口土器	—	—	—	刺突文	注口部	
35	SK54	縄文土器	深鉢	—	—	—	文様末端部ヒレ状、稜縫区画の無文部、無文部赤彩、刺突文	胴部片	
36	SK54	土製品	土製円盤	径5.2、厚0.8	—	—	単節	一部欠損	
37	SK54	土製品	土製円盤	径3.0、厚0.9	—	—	単節	完形	
38	SK56	縄文土器	深鉢	(10.0)	—	—	波濤文、沈縫区画の無文部、単節LR	口～胴部片	
39	1号埋設	縄文土器	深鉢	—	5.8	—	波状口縁4単位、波頂部に円孔、玉指き文、円文形、稜縫区画の無文部、無文部赤彩、刺突文、単節LR、波頂部先端打ち欠き	波頂部 欠損	40に納まる リン酸分析
40	1号埋設	縄文土器	深鉢	30.2	—	—	単節LR、底部打ち欠き	底部欠損	39に納まる リン酸分析
41	2号埋設	縄文土器	鉢	30.0	9.4	52.5	単節LR、底部中央打ち欠き	底部欠損	リン酸分析
42	下包W2区	縄文土器	鉢	—	—	—	波濤文、稜縫区画の無文部、単節RL	口縁部片	

No.	出土位置	種別	器種	計測値(cm)			文様・技法等の特徴	遺存部位	備考
				口径	底径	器高			
43	下包W2区	縄文土器	深鉢	32.8	—	—	波溝文か、棱線区画の無文部、單節LR	口～胴部片	
44	下包W1区	縄文土器	深鉢	(25.3)	7.8	39.5	雁又文、棱線区画の無文部、單節LR、底部中央打ち欠き	口～底部	
45	下包K5区	縄文土器	深鉢	—	—	—	腹部上半に4単位の円形文、棱線区画の無文部、無文部赤彩、單節	胴部	
46	下包V2区	縄文土器	深鉢	—	—	—	刺突文	口峰部片	
47	下包V2、W2区	縄文土器	深鉢	—	—	—	継紋横円文、棱線区画の無文部、刺突文	胴部片	
48	下包V2区	縄文土器	深鉢	—	—	—	棱線区画の無文部、刺突文	胴部片	
49	下包V2、W2・3区	縄文土器	深鉢	(35.2)	—	—	方形区画文・玉抱き文、沈線区画の無文部、單節LR	口～胴部片	
50	下包V2、W2区	縄文土器	深鉢	(28.6)	—	—	方形区画文、沈線区画の無文部、撲杀文	口～胴部片	
51	下包L5区	縄文土器	深鉢カ	—	—	—	方形区画文、後線区画の無文部、單節RL	口～胴部片	AMS法分析
52	下包R3区	縄文土器	深鉢	—	—	—	波状口縁、波須部に横乾格円孔、後線区画の無文部、單節	口～胴部片	AMS法分析
53	下包V2区	縄文土器	鉢カ	(12.6)	—	—	小型品、單節RL	口～胴部片	
54	下包V2区	土製品	用途不明品	—	—	—	中空の半球形を呈する、全面に円形刺突文	破片	
55	下包V2区	石器	不定形石器	長7.0、幅4.2、厚2.3、重44.5g、縱長剥片、片側縁に刃部	—	—	完形		
56	下包P10区	石器	不定形石器	長3.6、幅1.9、厚0.7、重30.0g、縱長剥片、両側縁に刃部	—	—	完形		
57	下包V2区	石器	不定形石器	長5.7、幅2.1、厚0.9、重7.8g、縱長剥片、両側縁に刃部	—	—	完形		
58	下包S3区	石器	不定形石器	長10.5、幅3.0、厚1.8、重32.6g、縱長剥片、両側縁に刃部	—	—	完形		
59	下包S3区	石器	剥片	長9.4、幅2.3、厚1.3、重16.0g、縱長剥片、片側縁に使用痕	—	—	完形		
60	下包V2区	石器	磨製石斧	長【8.0】、幅5.4、厚2.7、重2003g、ほぼ中央で折損	—	—	刃部		
61	下包W2区	石器	石墨+凹石	長【14.5】、幅21.2、厚5.6、重2040.0g、使用面に筋状の擦痕あり	—	—	大半欠損		

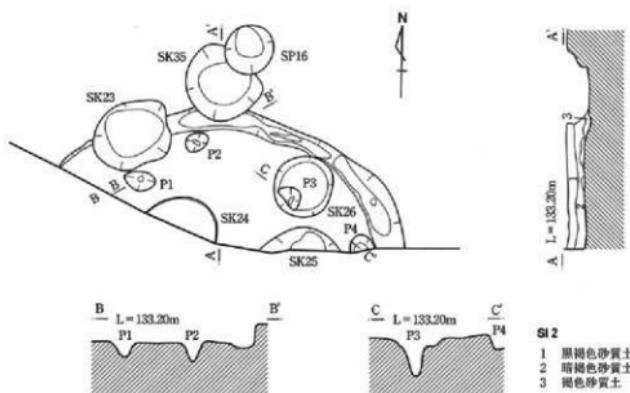
No.	出土位置	種別	器種	計測値(cm)			文様・技法等の特徴	遺存部位	備考
				口径	底径	器高			
62	SI 4 床面	赤燒土器	坏	13.0	6.0	4.7	底部回転糸切り、内外面クロナデ	2/3	
63	SI 4 床面	赤燒土器	坏	13.0	6.0	4.9	底部回転糸切り、内外面クロナデ	2/3	
64	上包Q3区	須恵器	坏	—	(8.4)	—	底部回転糸切り、内外面クロナデ	底部片	

SI1

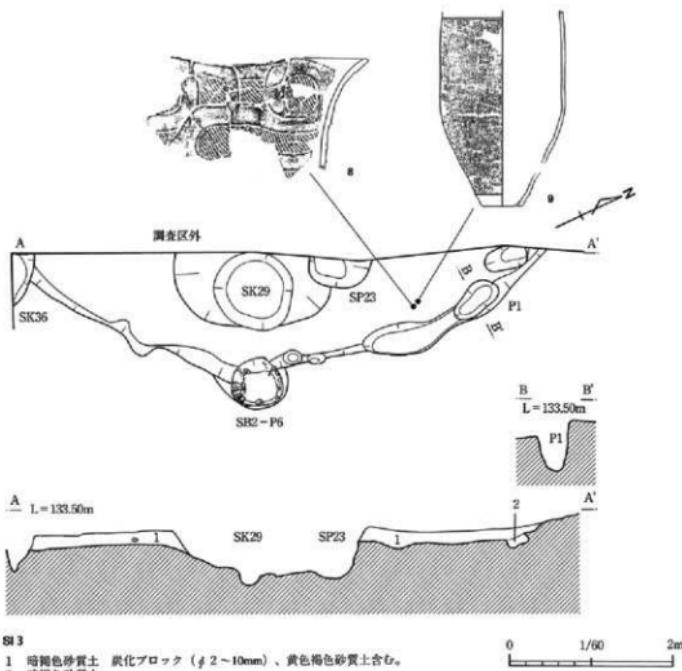


第6図 SI1

SI 2

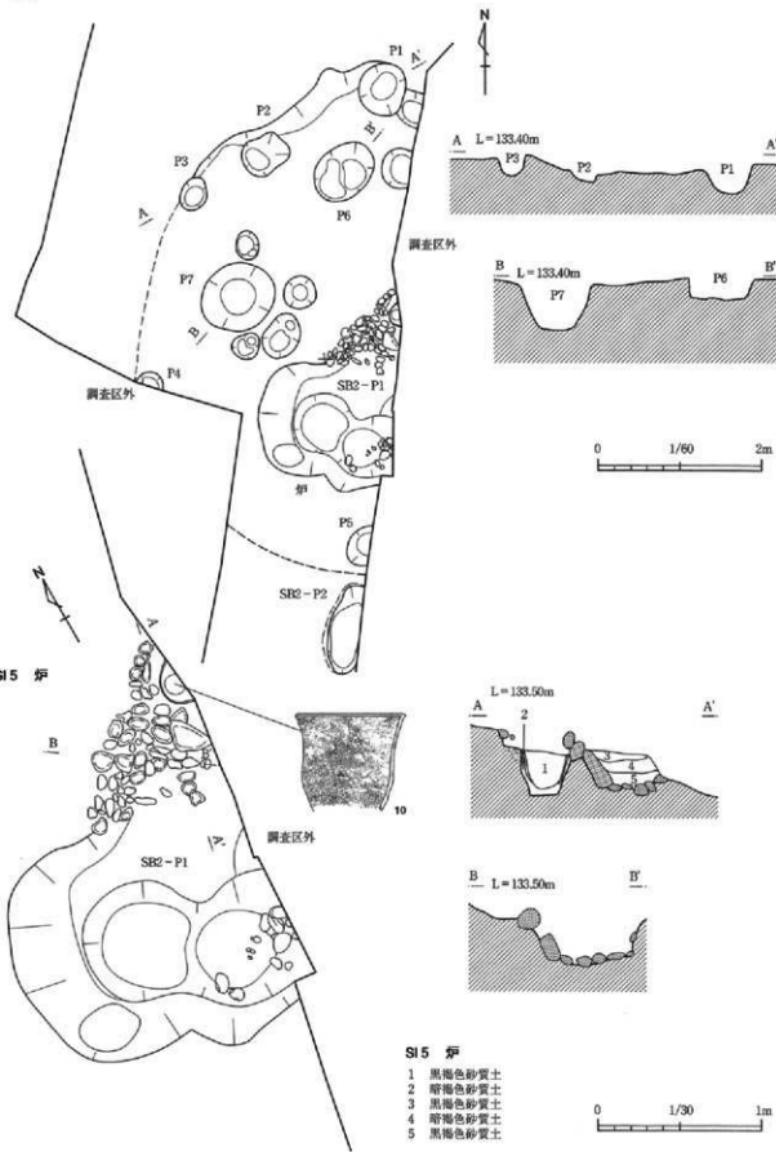


SI 3

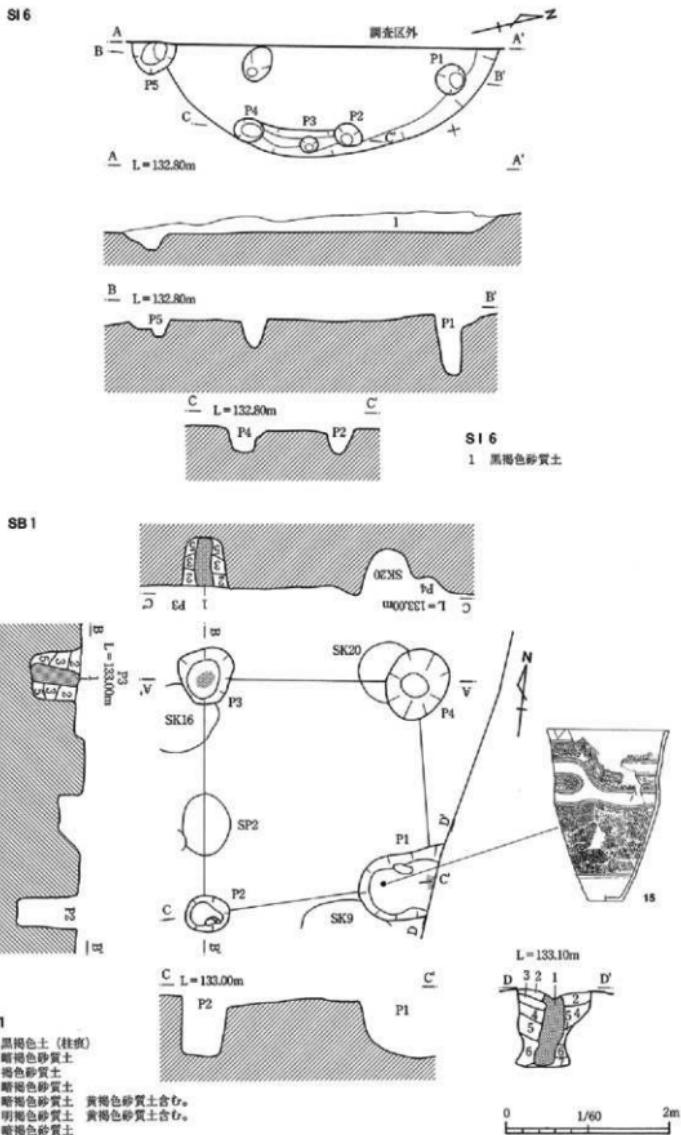


第7図 SI 2・3

SI 5

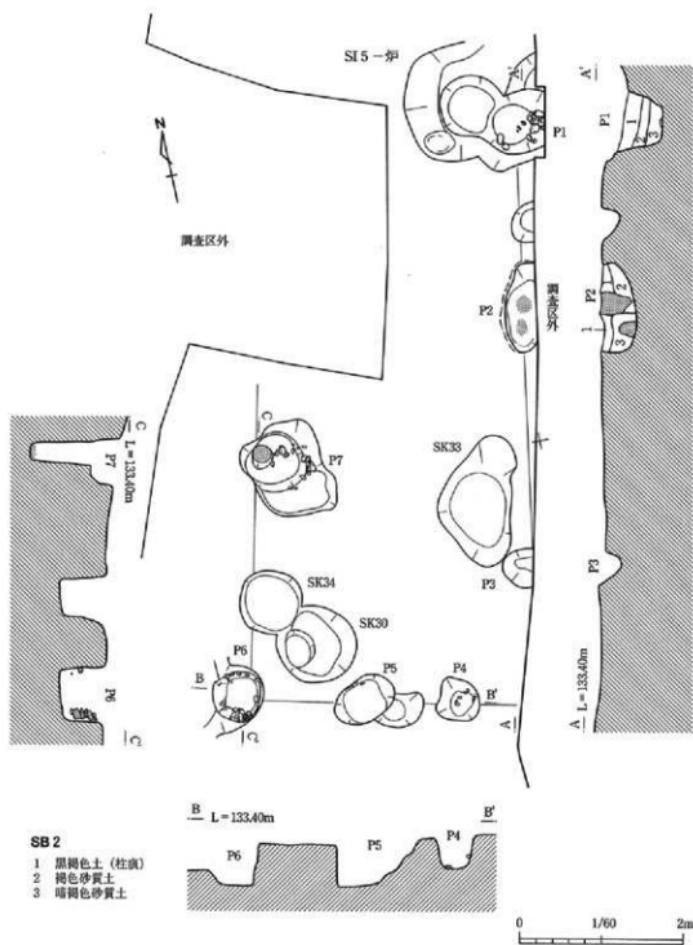


第8図 SI 5

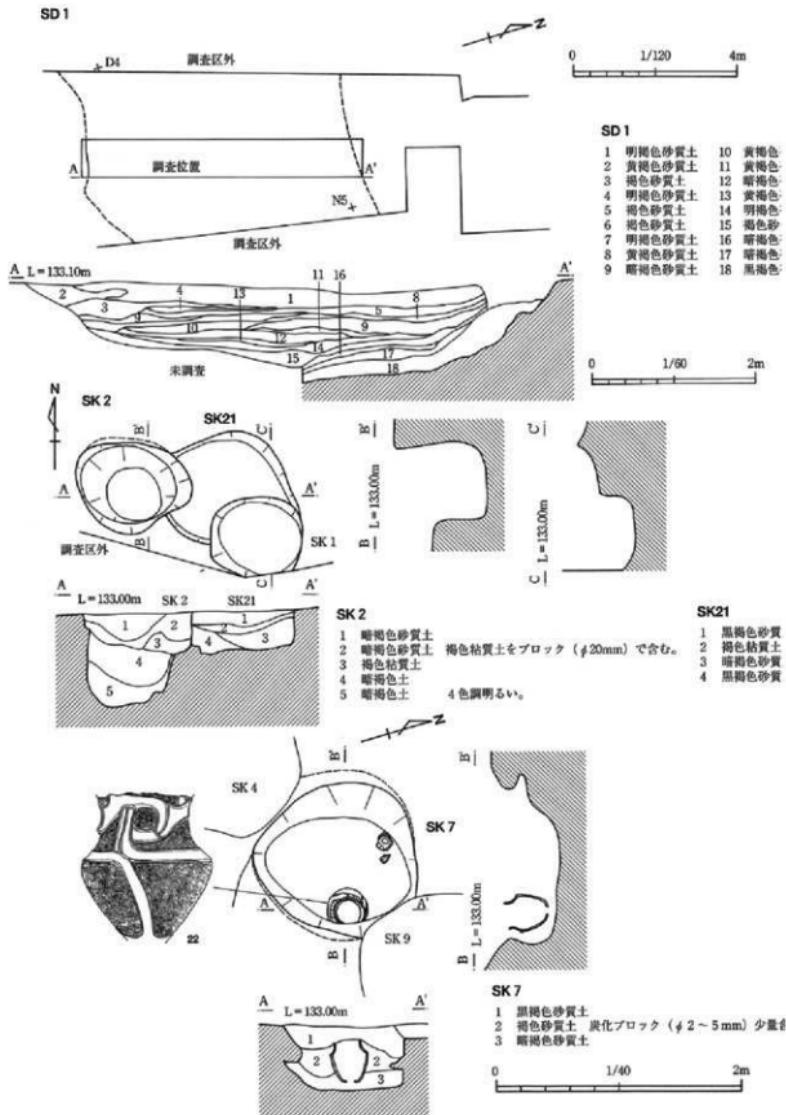


第9図 SI 6、SB 1

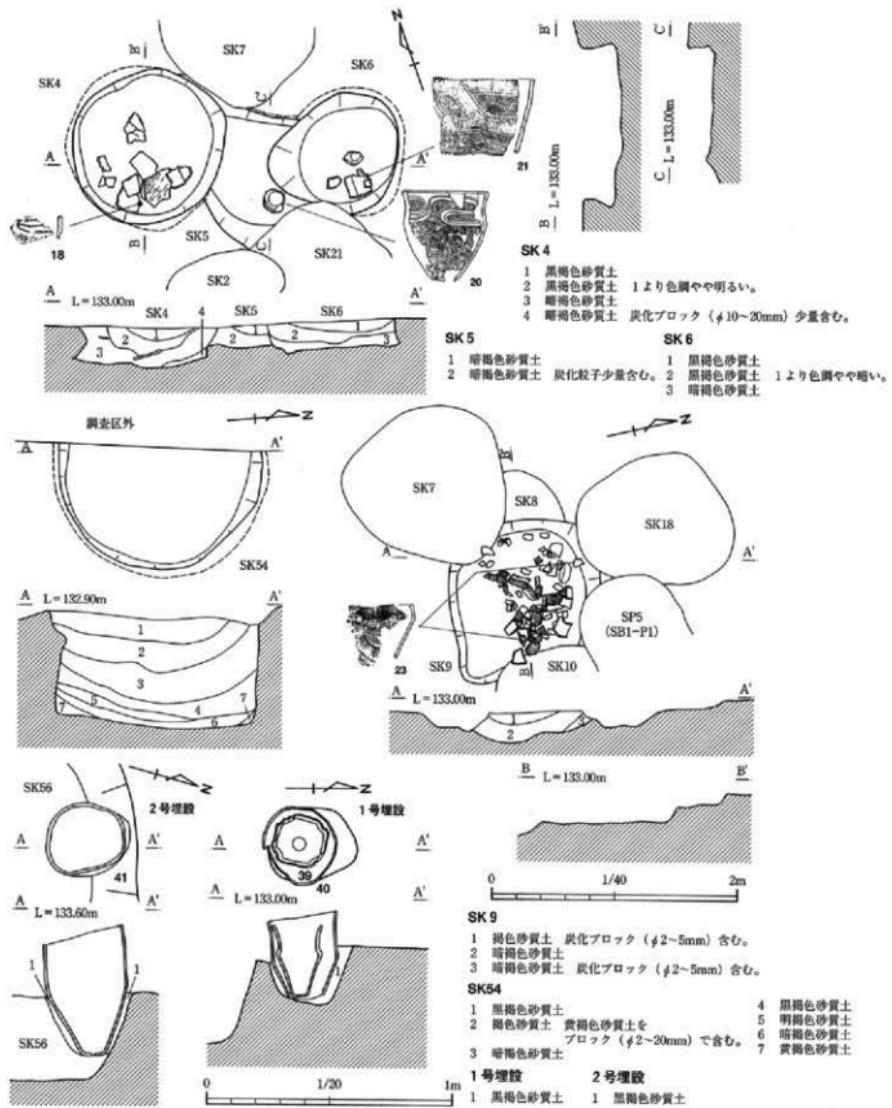
SB 2



第10圖 SB 2

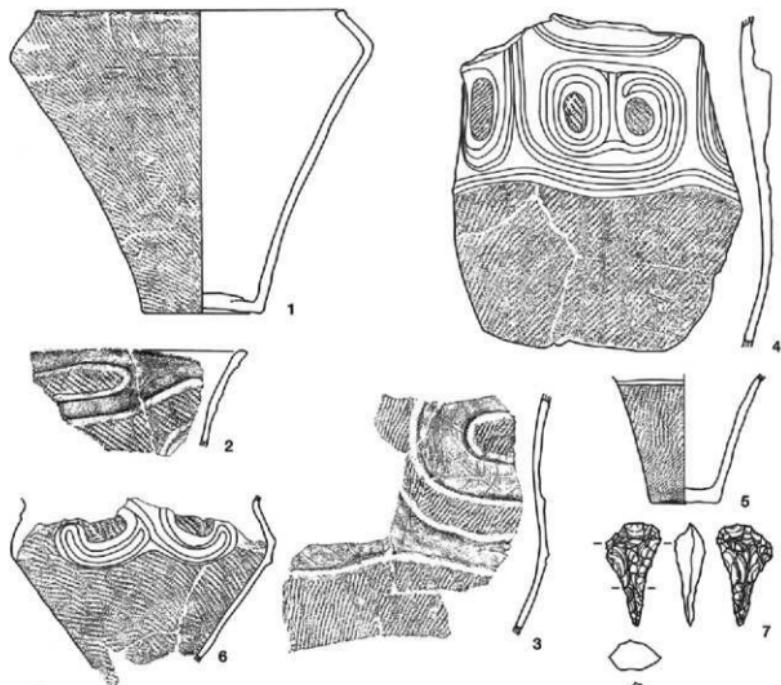


第11図 SD 1、SK 2・7・21

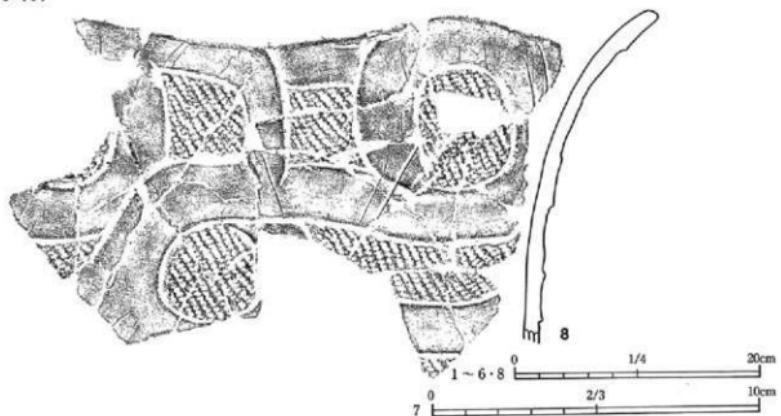


第12図 SK 4・5・6・9・54、1・2号堆設

SI1 (1~7)



SI3 (8)

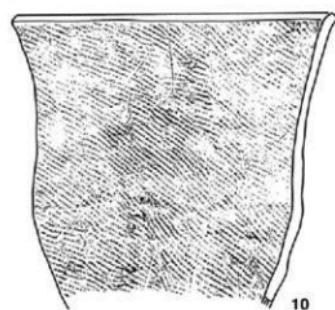


第13図 SI1・3出土遺物

SI 3 (9)



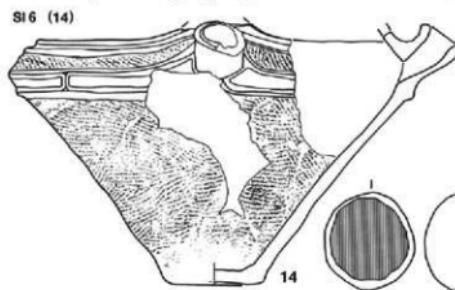
SI 5 (10~13)



SB 1 (15)



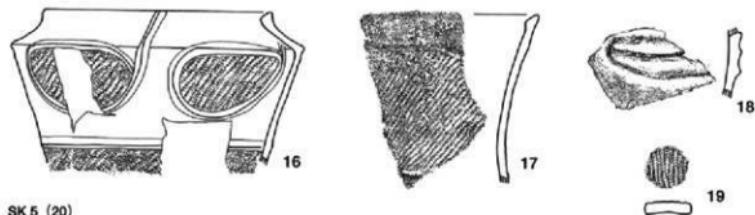
SI 6 (14)



9 ~ 15 0 1/4 20cm

第14図 SI 3・5・6、SB 1 出土遺物

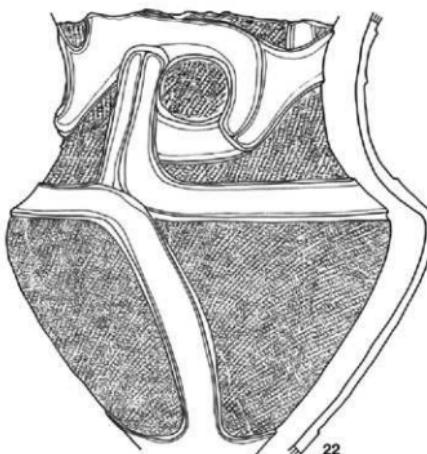
SK 4 (16~19)



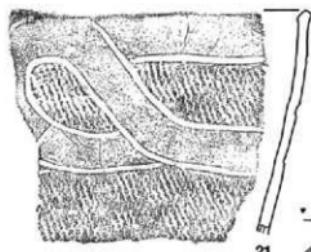
SK 5 (20)



SK 7 (22)

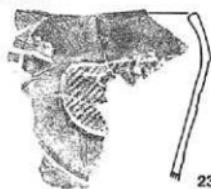


SK 6 (21)



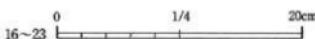
21

SK 9 (23)



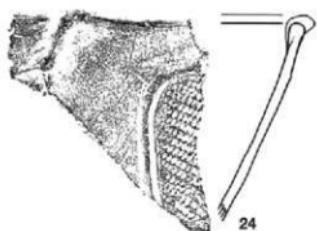
23

文様展開模式図 (S ≈ 1/8)

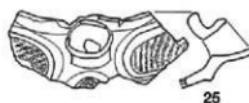


第15図 SK 4 ~ 7 + 9 出土遺物

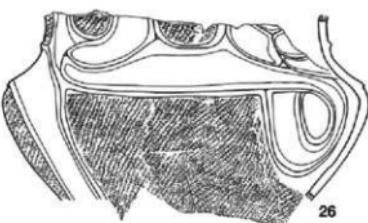
SK 11 (24)



SK 20 (25)



SK 24 (26・27)



SK 42 (28・29)



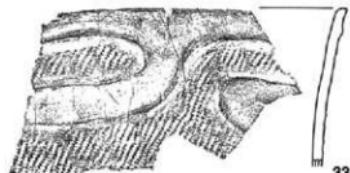
SK 47 (30)



SK 50 (31・32)



SK 52 (33・34)



SK 54 (35～37)



SK 56 (38)



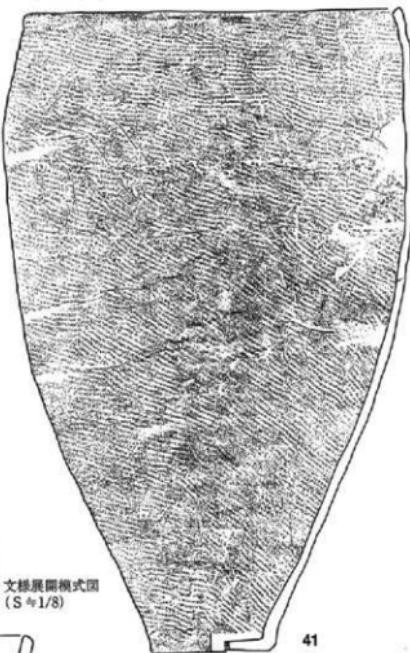
24～38 0 1/4 20cm

第16図 SK11・20・24・42・47・50・52・54・56出土遺物

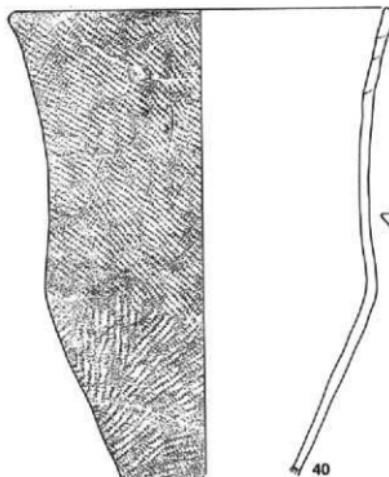
1号埋設 (39・40)



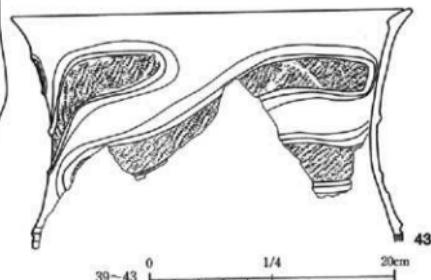
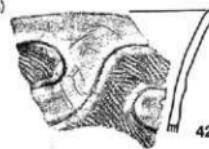
2号埋設 (41)



文様展開模式図  
(S ≈ 1/8)



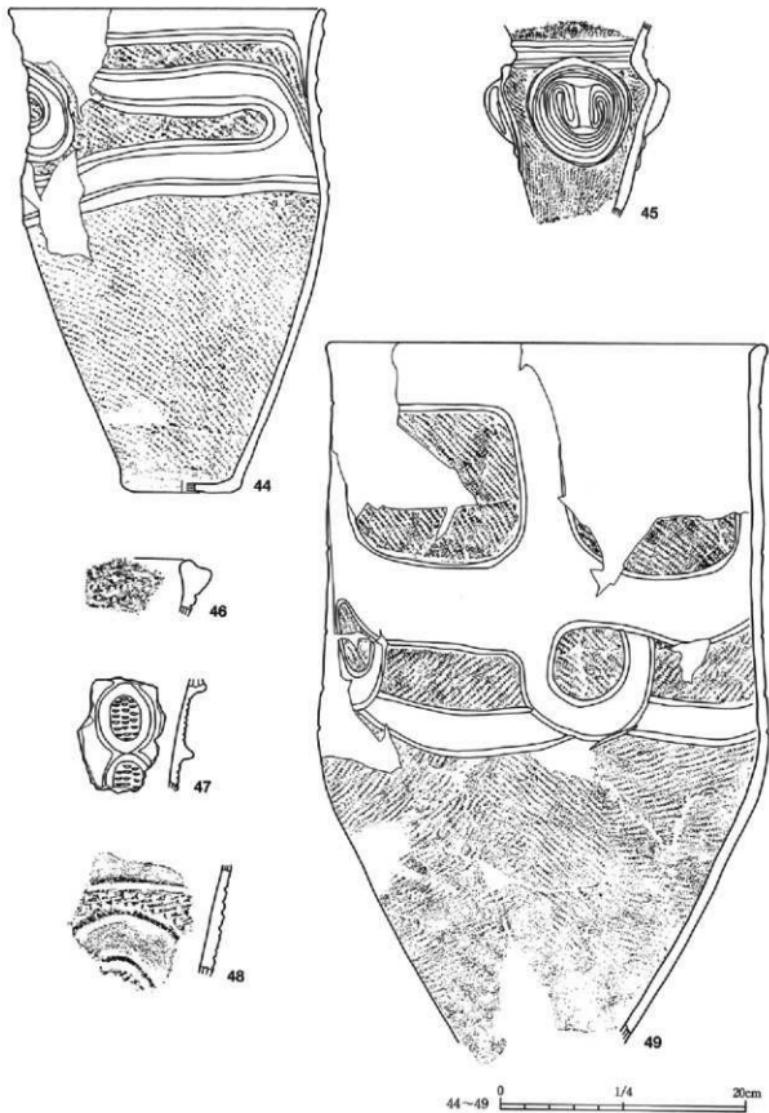
下層包含層 (42・43)



39-43 0 1/4 20cm

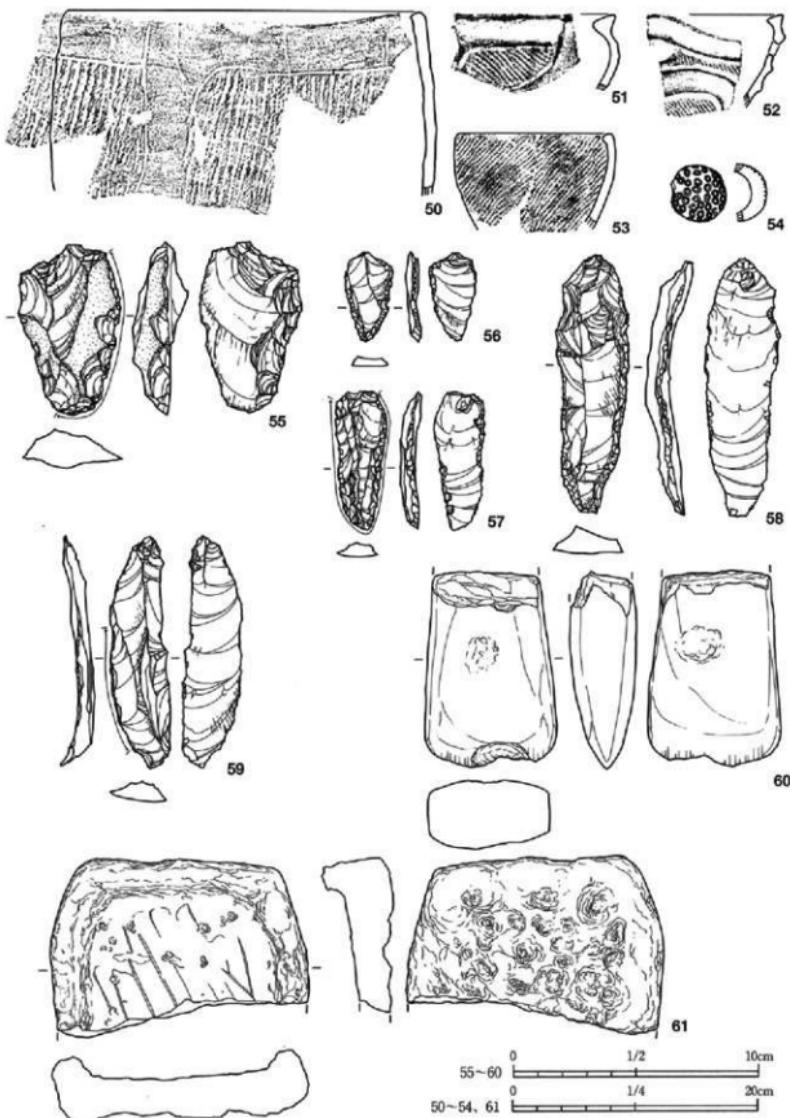
第17図 1・2号埋設、下層包含層出土遺物

下層包含層 (44~49)

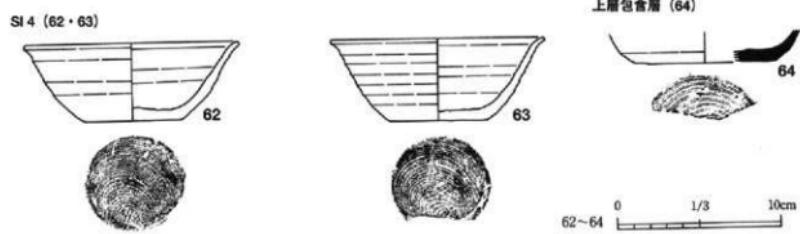
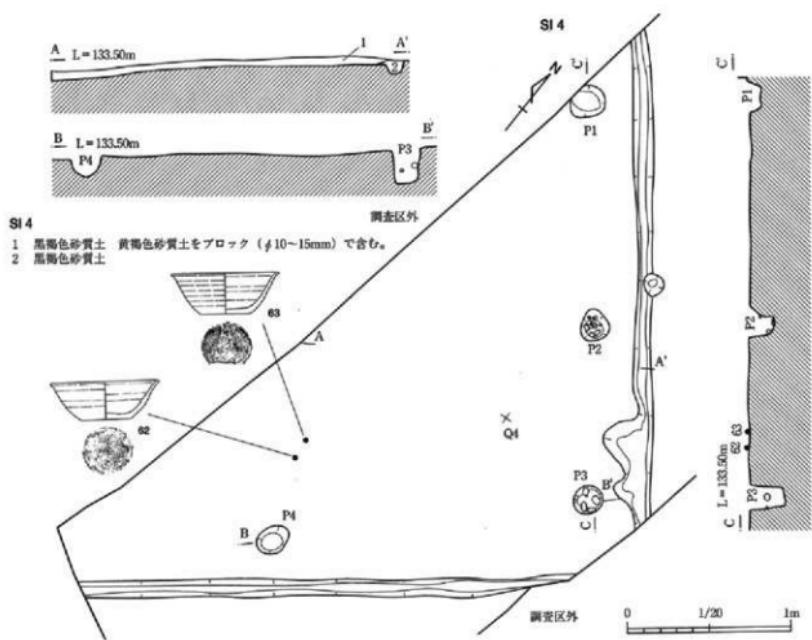


第18図 下層包含層出土遺物

下層包含層 (50~61)



第19図 下層包含層出土遺物

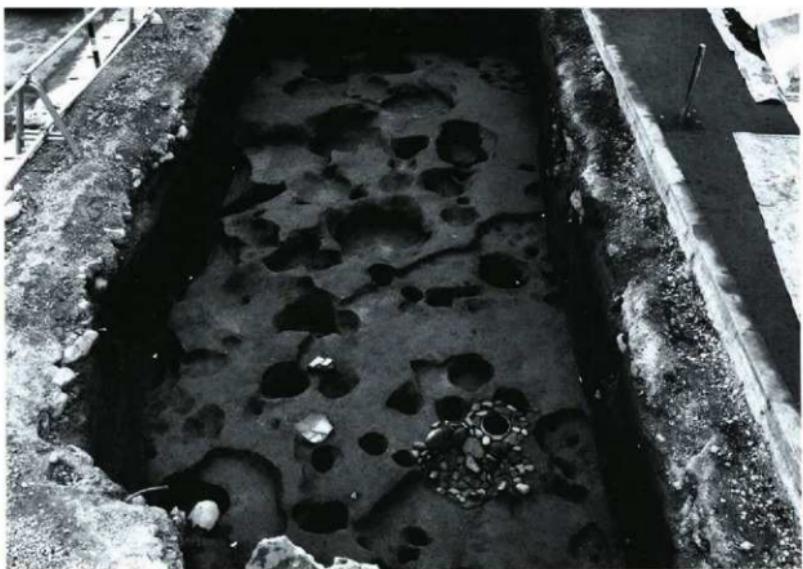


第20図 SI 4、SI 4・上層包含層出土遺物

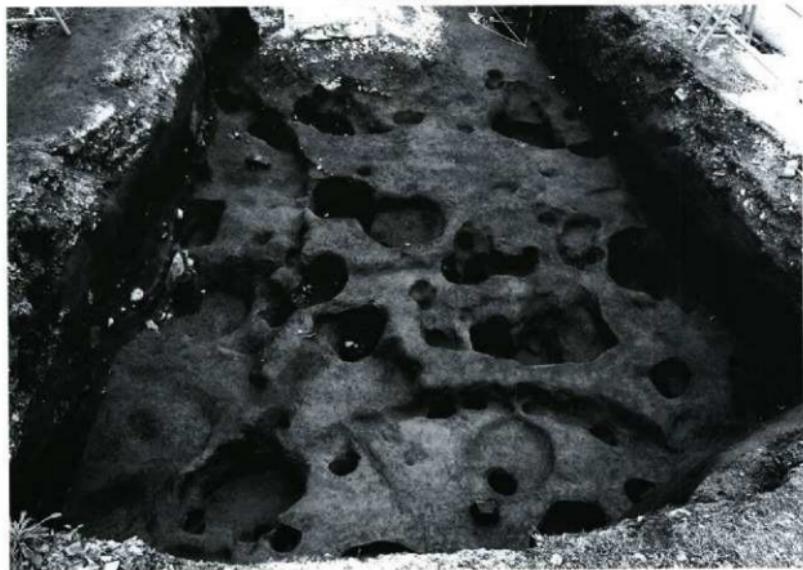
# 写 真 図 版



図版 1 遺構

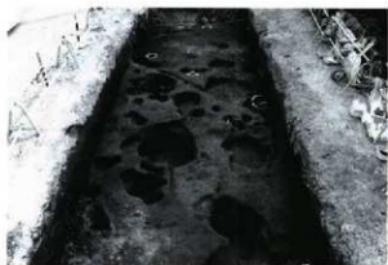


1区 全景（北から）



2区 南側全景（南から）

図版  
2 遺構



2区 北側全景（北から）



3区 全景（北から）



4区 全景（北から）



1区 基本堆積土層（東壁）



S I 1 全景



S I 1 複式炉セクション（北から）



S I 1 複式炉近景（北東から）



S I 2 全景（東から）

図版3 遺構



S13 全景 (東から)



S15 全景 (南西から)



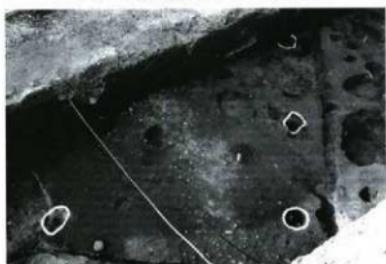
S15 複式炉近景 (東から)



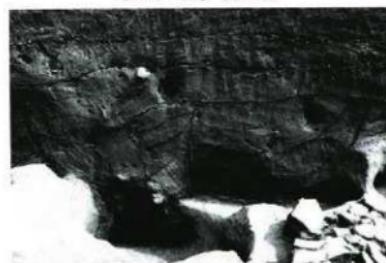
S15 埋設土器セクション (西から)



S16 全景 (東から)



S14 全景 (東から)



SB1-P1セクション (西から)



SB2-P1セクション (西から)

図版  
4  
遺構



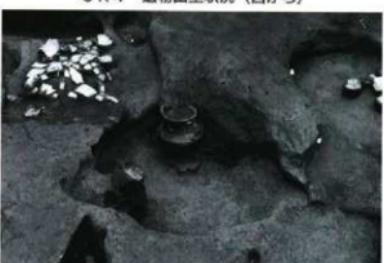
SK 1・2・21全景 (東から)



SK 4 遺物出土状況 (西から)



SK 5 遺物出土状況 (東から)



SK 7 遺物出土状況 (西から)



SK 9 遺物出土状況 (東から)



SK 54 セクション (東から)



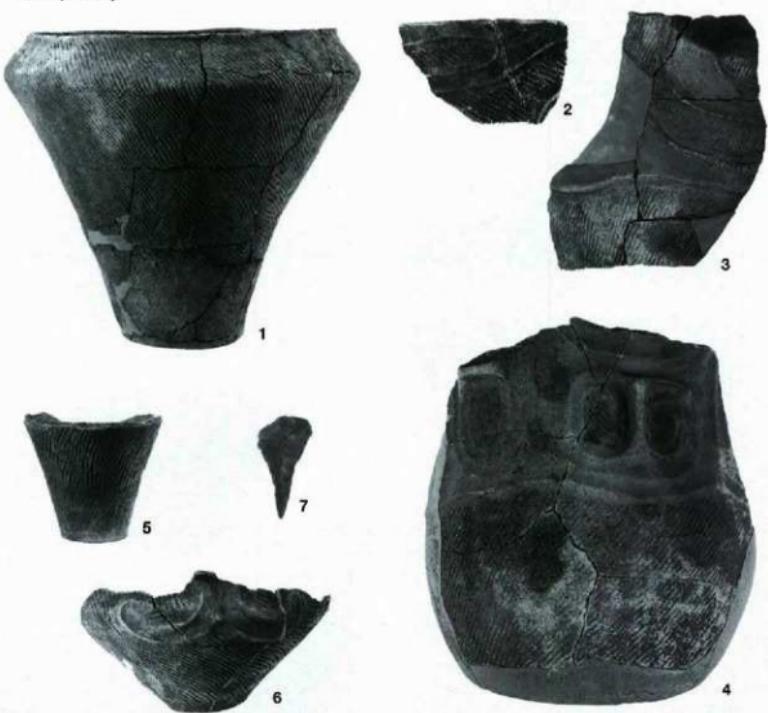
1号埋設土器 (北から)



2号埋設土器 (北から)

図版 5 出土遺物

SI 1 (1~7)



SI 3 (8)



図版 6 出土遺物

SI3 (9)



SI5 (10~13)



10



12

SB1 (15)



15

SI6 (14)



14

13



11



SK 4 (16~19)



16



17



18



19

SK 5 (20)



20

SK 7 (22)



22

SK 6 (21)



21

SK24 (26)



26

SK 9 (23)



23

SK11 (24)



24

SK20 (25)



25

図版  
8 出土遺物

SK24 (27)



SK42 (28・29)



28  
29

SK47 (30)



30

SK50 (31・32)



31



32

SK52 (33・34)



33

SK54 (35~37)



34



35



36



37

SK56 (38)



38

1号埋設 (39・40)



39



40

圖版 9 出土遺物

2号埋設 (41)



41

下層包含層 (42~48・50)



42



45



50



43



44



46



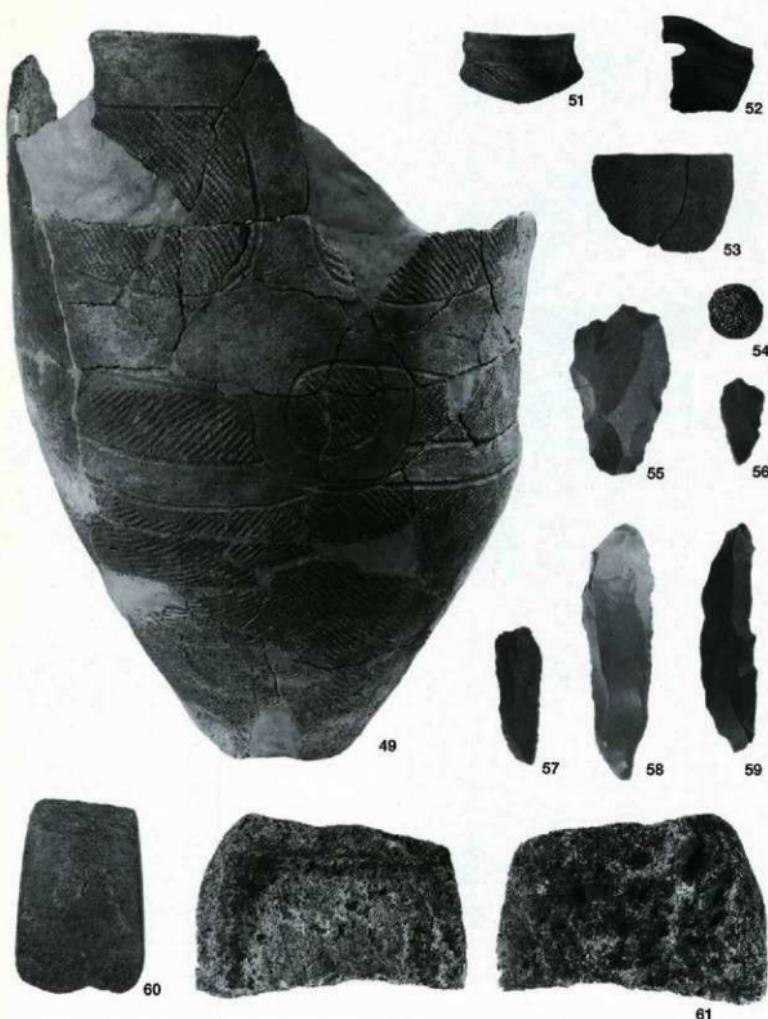
47



48

図版  
10 出土遺物

下層包含層 (49・51~61)



SI 4 (62・63)



上層包含層 (64)



## 報告書抄録

ふりがな	やまがたにしこうしきちないいせきはつくつちょうさほうこくしょ
書名	山形西高敷地内遺跡発掘調査報告書
副書名	
卷次	
シリーズ名	山形県山形市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第18集
編著者名	桐谷優 湯原勝美 武田和宏
編集機関	山武考古学研究所 〒286-0045 千葉県成田市並木町221番地 TEL0476-24-0536
発行機関	山形市教育委員会 〒990-8540 山形県山形市旅籠町2-3-25 TEL023-641-1212
発行年月日	2004年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町 村	県遺跡 番号					
山形西高敷地内遺跡	山形県山形市 若葉町12-21	6201	29	38度 14分 19秒	140度 19分 36秒	20030925 ～ 20031130	800m <sup>2</sup> (1,600m <sup>2</sup> ) 2面	都市計画道路美堀 天童線改良工事
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
集落跡	縄文時代中期 末葉	堅穴住居跡 掘立柱建物跡 河道跡 土坑 ピット 埋設土器		5軒 2棟 1条 56基 20基 2基	土器 浅鉢、深鉢、台付鉢 土製品 土製円盤 石器 石錐、不定形石器、磨製石斧、磨石、石皿			1号埋設土器からは、文様帯に赤彩が施された深鉢形土器が入れ子状で出土した。
集落跡	平安時代	堅穴住居跡 ピット		1軒 3基	土器 土師器坏			

### 山形西高敷地内遺跡発掘調査報告書

平成16年3月31日

編集 山武考古学研究所  
 千葉県成田市並木町221  
 発行 山形市教育委員会  
 山形県山形市旅籠町2-3-25  
 印刷 勝文化総合企画  
 千葉県富里市日吉台1-23-12  
 TEL 0476-93-0593

